出雲重機

INDUSTRIAL DIVINITIES

"架想重機"現る!

これはもう、『インダストリアル・アート』だ。

CAPCOM / X-BOX

[鉄騎]・メカデザイナー
大久保淳二デザインワークス



S2WT Kamdo (カムド)

出雲重機

INDUSTRIAL DIVINITIES


出雲重機
INDUSTRIAL DIVINITIES


COOLANT FILL
ON TOP
CAUTION: DO NOT STAND OR STORE
HEAVY OBJECTS ON TOP OF UNIT
CAUTION:
出雲重機
INDUSTRIAL DIVINITIES

ごあいさつ

平素より弊社製品への格別なるご愛顧を賜り、厚く御礼申し上げます。

西暦弐千年の創業以来、出雲重機は他に類を見ない先進的かつ独創的な技術力を生かし“高い信頼性と確かなクオリティの実現”を目標に努力を続けて参りました。

現在では、国内外を問わず幅広い顧客ニーズに対応する製品を世界に送り出しています。一般家庭用商品から、宇宙開発分野製品にいたるまで、伝統を尊びながら進取の精神を持ってオリジナリティ溢れる商品を創出し、世界中の暮らしの中へ、豊かな未来の創造に貢献したいと考えます。

この度、当社が誇る製品ラインナップを一堂に集め、ここにご紹介できる機会を与えられましたことは大いなる喜びであります。
今後も実りある未来を目指し前進を続けて参ります出雲重機に、あたたかいご支援とご愛顧を賜りますようお願い申し上げます。

代表　大久保淳二

出雲重機とは？

“出雲重機”は、デザイナー／イラストレーターの大久保淳二によるメカニカルキャラクターデザインの創作実験企画であり、作品発表のひとつの形である。実際の重機を製造・販売している会社……というわけではない。

しかしながら、出雲重機を「虚構の存在」と言い切ることはできない。人々の視線を釘付にし、好奇心を鷲掴みにするほどの斬新なフォルムにもかかわらず、現代社会の生活感ある風景の中に置いても違和感のない出雲重機のデザイン。しかもこれらは揺るぎのない、圧倒的なリアリティをもってそこに存在する。

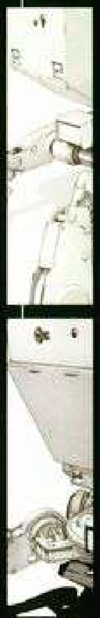
そのひとつの理由は実際に作動する際の挙動やバランス、速度までもがそれぞれの重機に関して想定されているから。また、パーツ一点一点に至るまでその構造や取り付け方が吟味されているのみならず、“同部品を他の機体にも転用できるのか？”といった汎用性やコスト性に至るまで、まるで経営者の視点に立った開発方法を行っていることによるものだ。

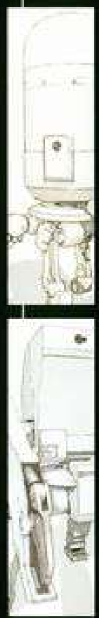
同時に出雲重機は“メカニカルキャラクター”が、神話や宗教といった古来からのモチーフに成り代わるイコンとして、普遍的かつ抽象的原理の表現における最新のスタイルであることを提唱しており、大久保淳二はむしろ（架空の重機メーカーを仮想することよりも）この考えに重点を置いて創作活動を行っている。

機械はあくまでも人間とは一線を画する存在。
それだからこそ共存できる。
出雲重機の全てが静かに物語る。

IZMOJUKI INDUSTRIAL DIVINITIES

CONTENTS











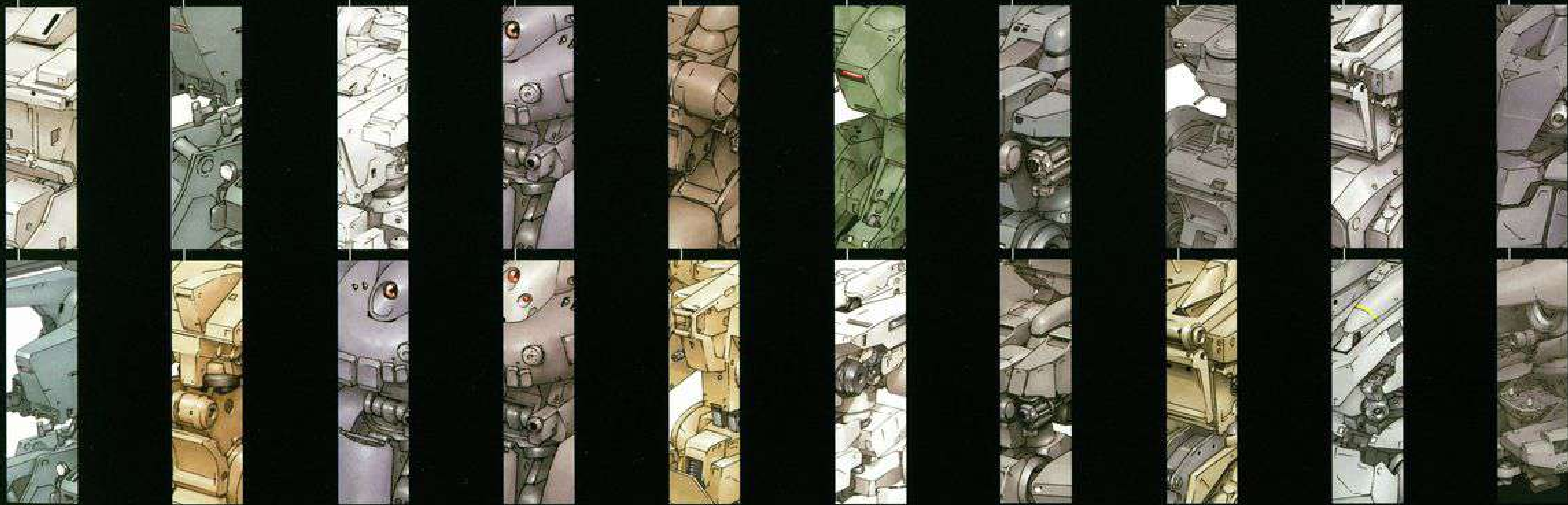












CONCEPT & VARIATION

1

"Ur/Ei-12600"

Coordination and posture control unit

"Ur/Ei-12600"姿勢制御ユニット

脚部ユニットによる安定した移動を行う為に姿勢制御を司る装置。ユニット前部のスキャナーモジュールには地形スキャナーとナビゲーションシステムを搭載した移動管制装置が搭載されており、メインユニット無しでも移動が可能である。

2

Ur/Ei-12600 Series

Ur/Ei-12600 系重機

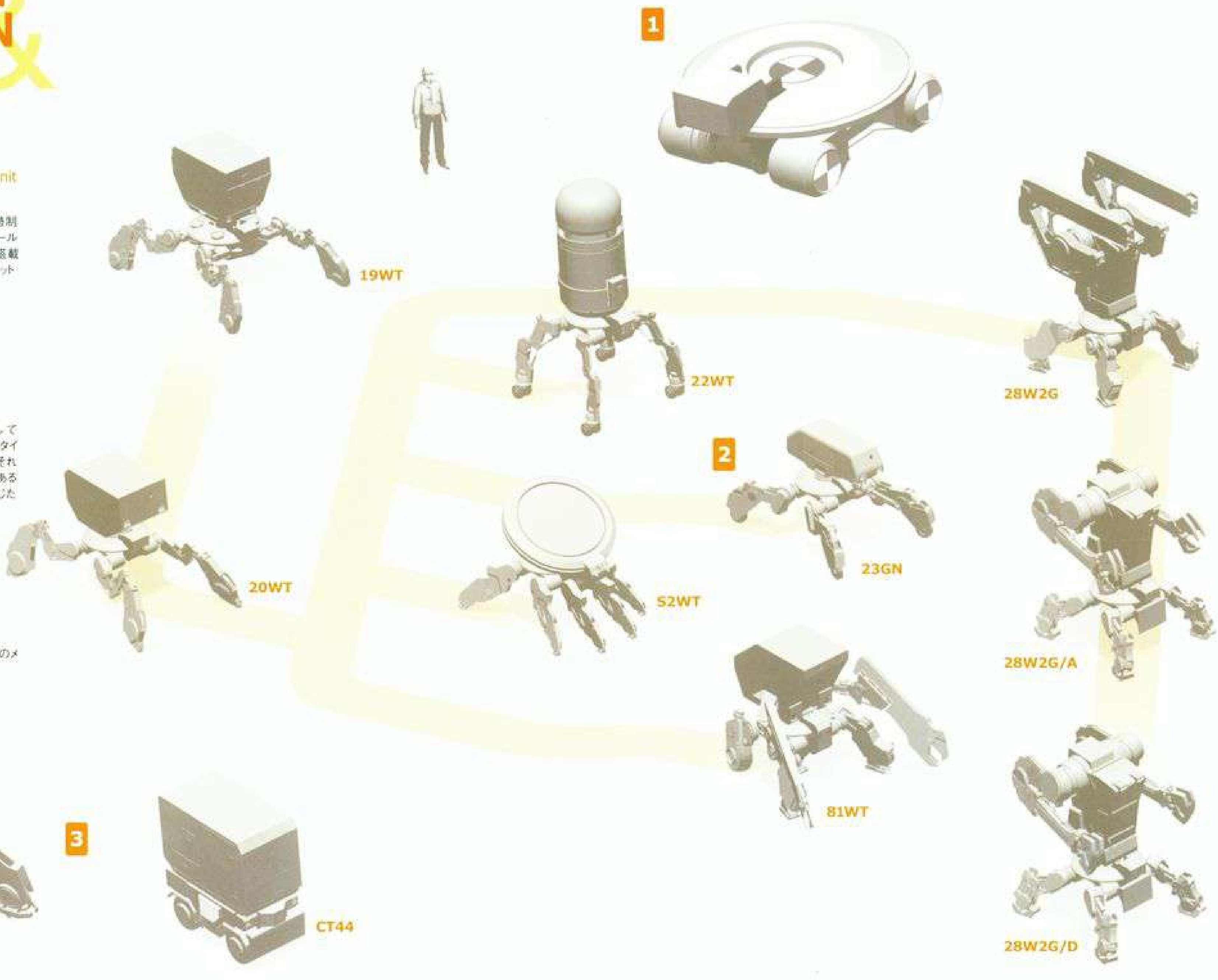
メインユニットと脚部ユニットの基部として"Ur/Ei-12600" 移動制御ユニットを介しているタイプ。各重機のメインユニット及び脚部ユニットはそれぞれ汎用性を有しており（重量などによる制限はあるが）多種多様のバリエーションにより、用途に応じた組み合わせが可能になっている。

3

Special Purpose Type

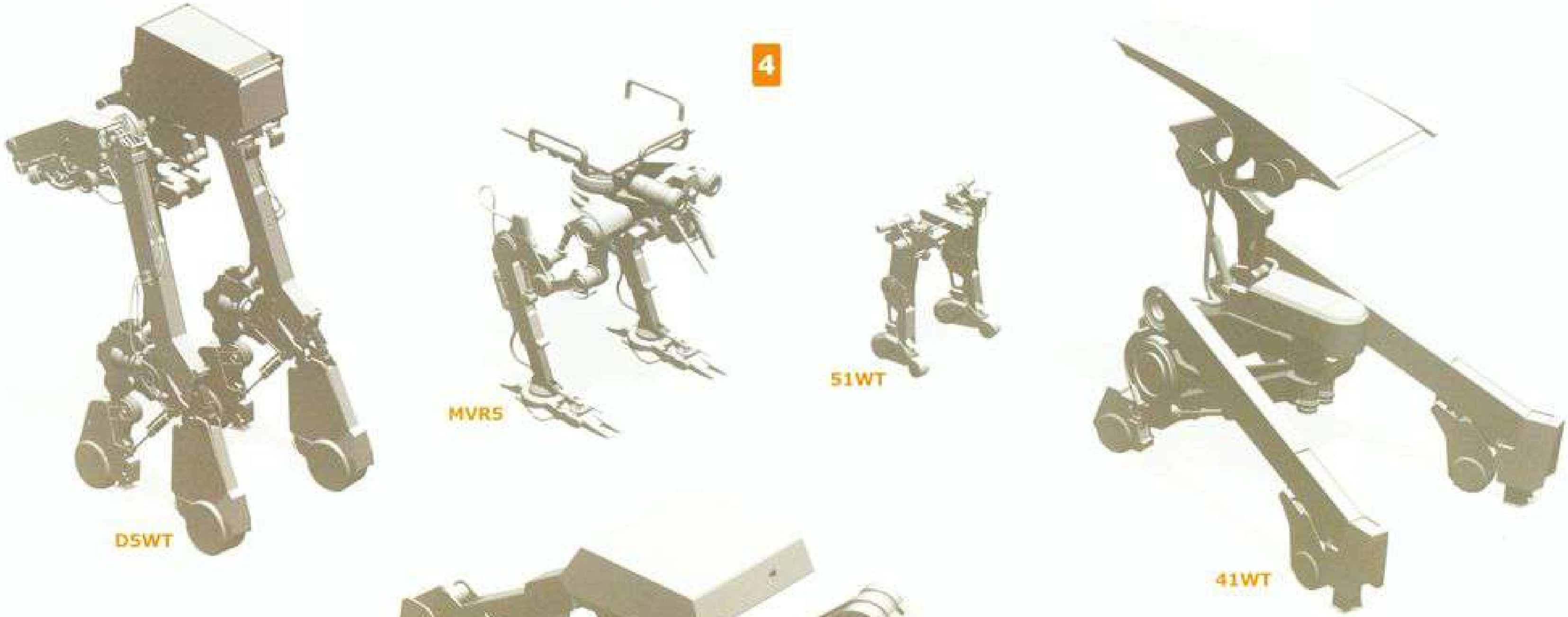
特殊用途系重機

搭載しているメインユニットが、Ur/Ei-12600 系のメインユニットとの相互交換性を持っている。

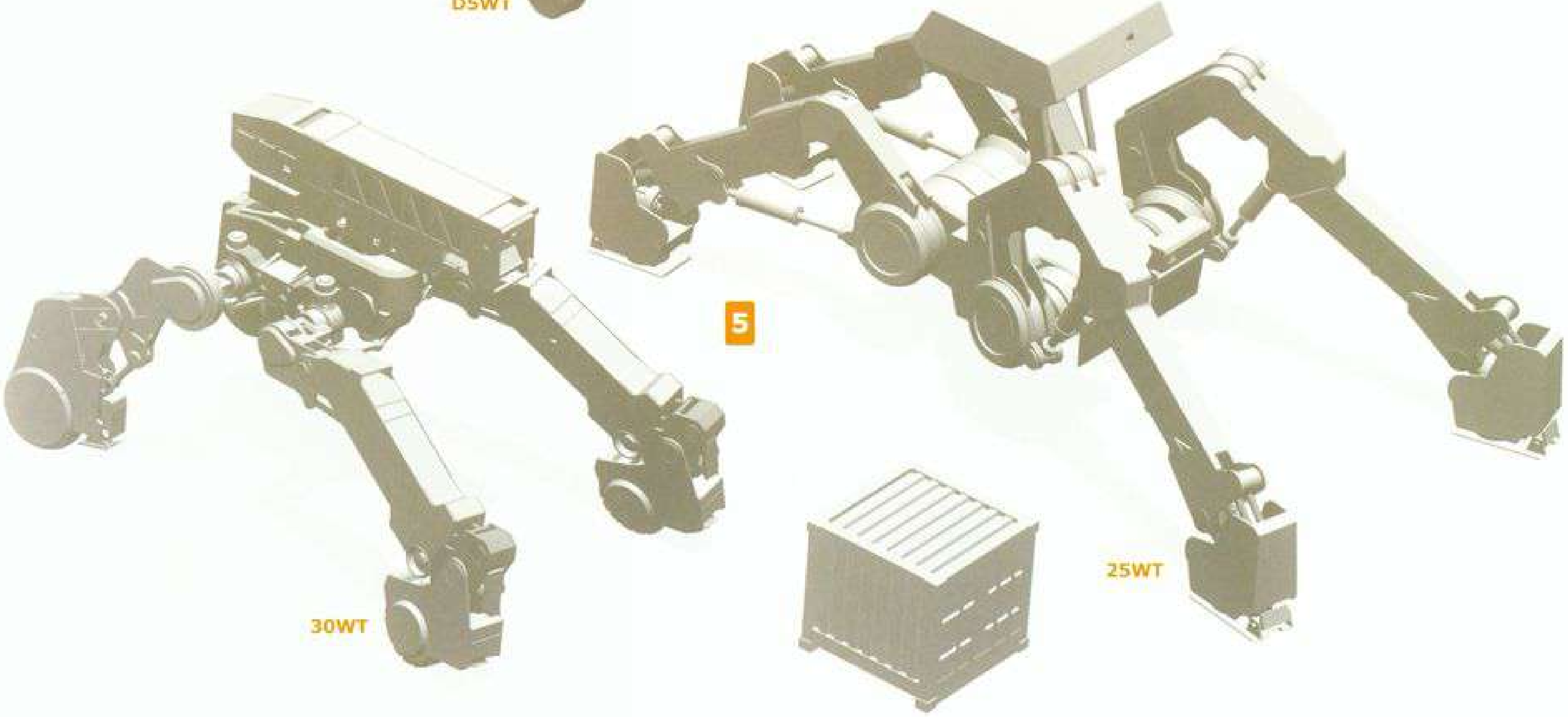




4



5



4 Biped Locomotion Type

二足式重機

独自の移動管制装置と、二本の脚部ユニットでの移動を可能とする。ローラーブレードのように重量移動によって移動コントロールするタイプと、二足歩行を行うタイプの2種類に分かれる。

5 Large Quadrupedal Locomotion Type

大型四足式重機

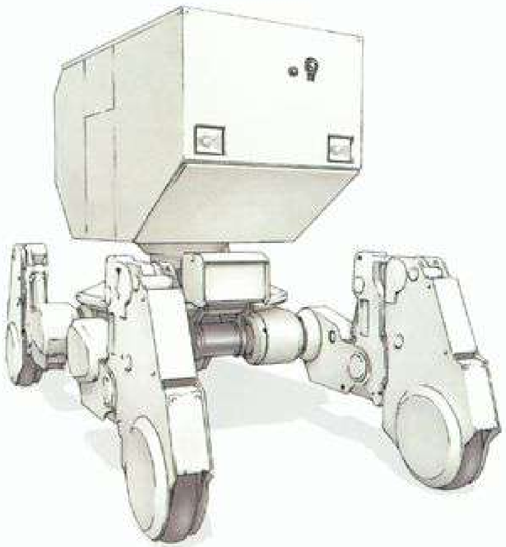
四本の大型脚部ユニットで立脚し移動するタイプの重機。それぞれの用途に特化し、汎用性は低くなっている。


1

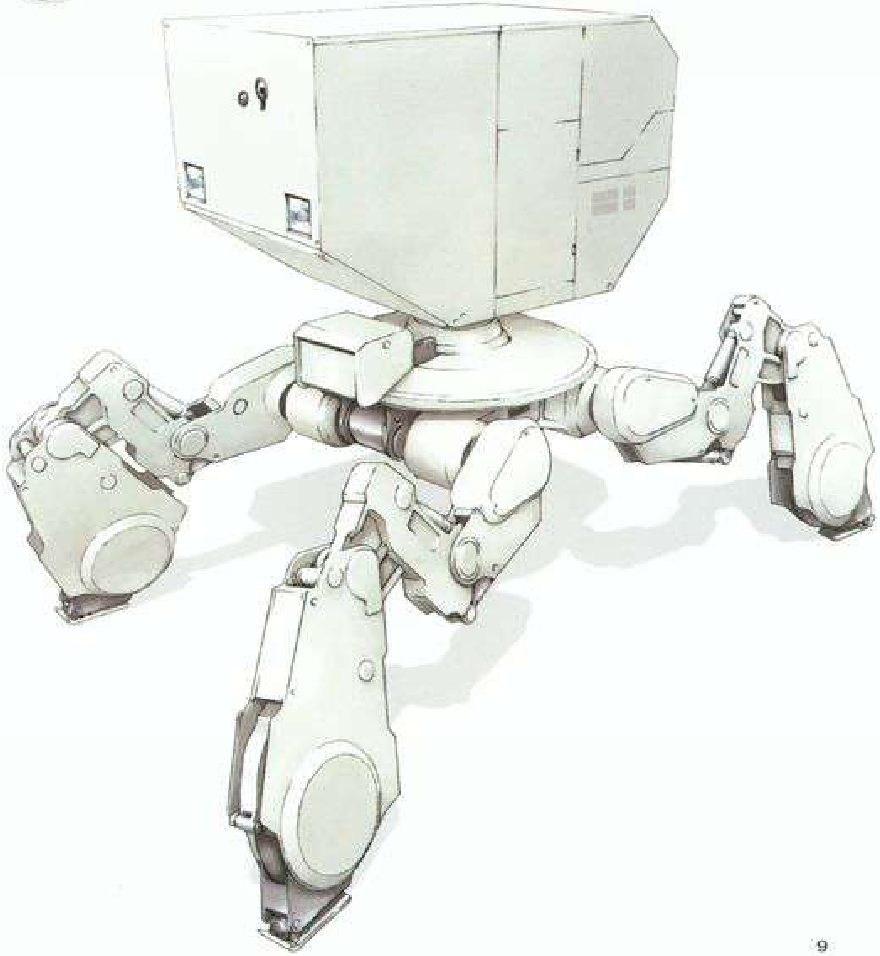
20WT Delco

Weight:	1,250kg
Length:	330cm (minimum)
	370cm (maximum)
Height:	205cm (minimum)
	230cm (maximum)

街をさまよう見慣れぬロボット。しかし人々は驚いて足を止めることもなく、当たり前のように脇を通り過ぎてゆく。これはまさに機械仕掛けの妖怪。それも怨念や魔物が生み出すおどろおどろしく怖いものではなく、さして害の無い「唐傘お化け」の類であろう。その目的や機能は人知の及ばぬところにあるものの、これは間違いなく現存する企業によって製作されたプロダクツ＝製品なのであり、それ故に街中に存在しても違和感がない。周囲の風景から「浮く」ことなく、極めて自然に溶け込んでいる。そこに"宿るモノ"に気付かぬ人には、ただのありふれた日常の一部と映る。



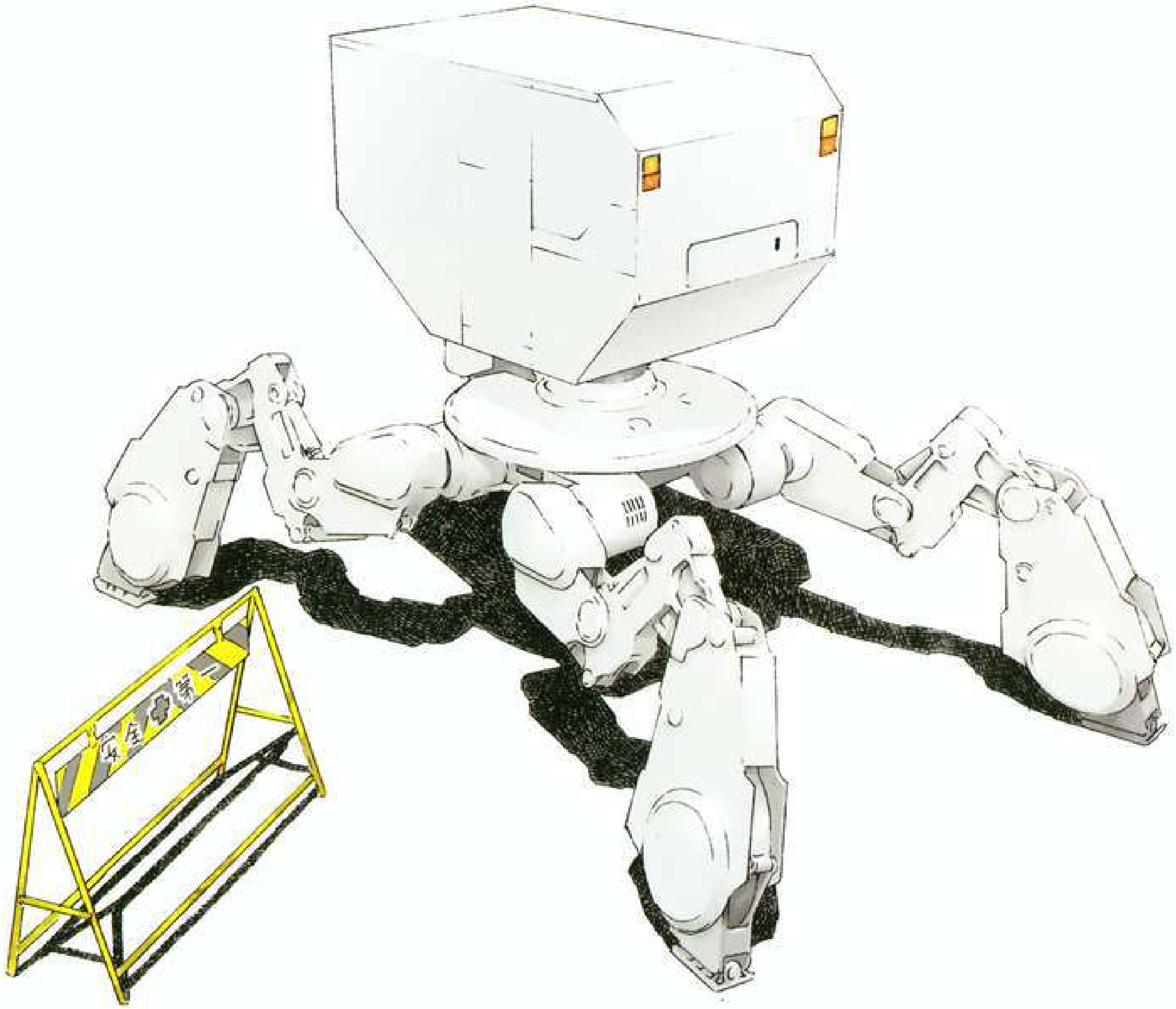
「出雲重機が企業として初めて世に問うた製品」というコンセプトでデザインされた機体。それがこの20WT Delcoである。箱型の頭部ユニット、円盤状の本体基部、そして多重関節を有する4本の脚。最も初期の出雲重機製品である。頭部ユニット前方には四角いヘッドランプ1対と、1個の鍵穴状のセンサー、カメラのようなものが見受けられる。後方にはテールランプのようなものもあり、足先には高速走行用タイヤと、金属製接地ギアの両方を備えているようだ。すなわち、脚を折り畳んだ状態では道路上を高速で走行可能なのではないか？　目的地に着くと脚を展開し、4足歩行動物のように、あるいは昆虫のように、地面をゆっくりと歩きながら緻密な行動を取るのだろう。本体基部のボールジョイントと多重関節により、その動きは極めてスムースと思われる。頭部ユニットへの振動も最小限に抑えられ、高次元精密機器や大容量コンピューターの搭載も可能と思われる。 AM





デルコ

20WT **Delco**

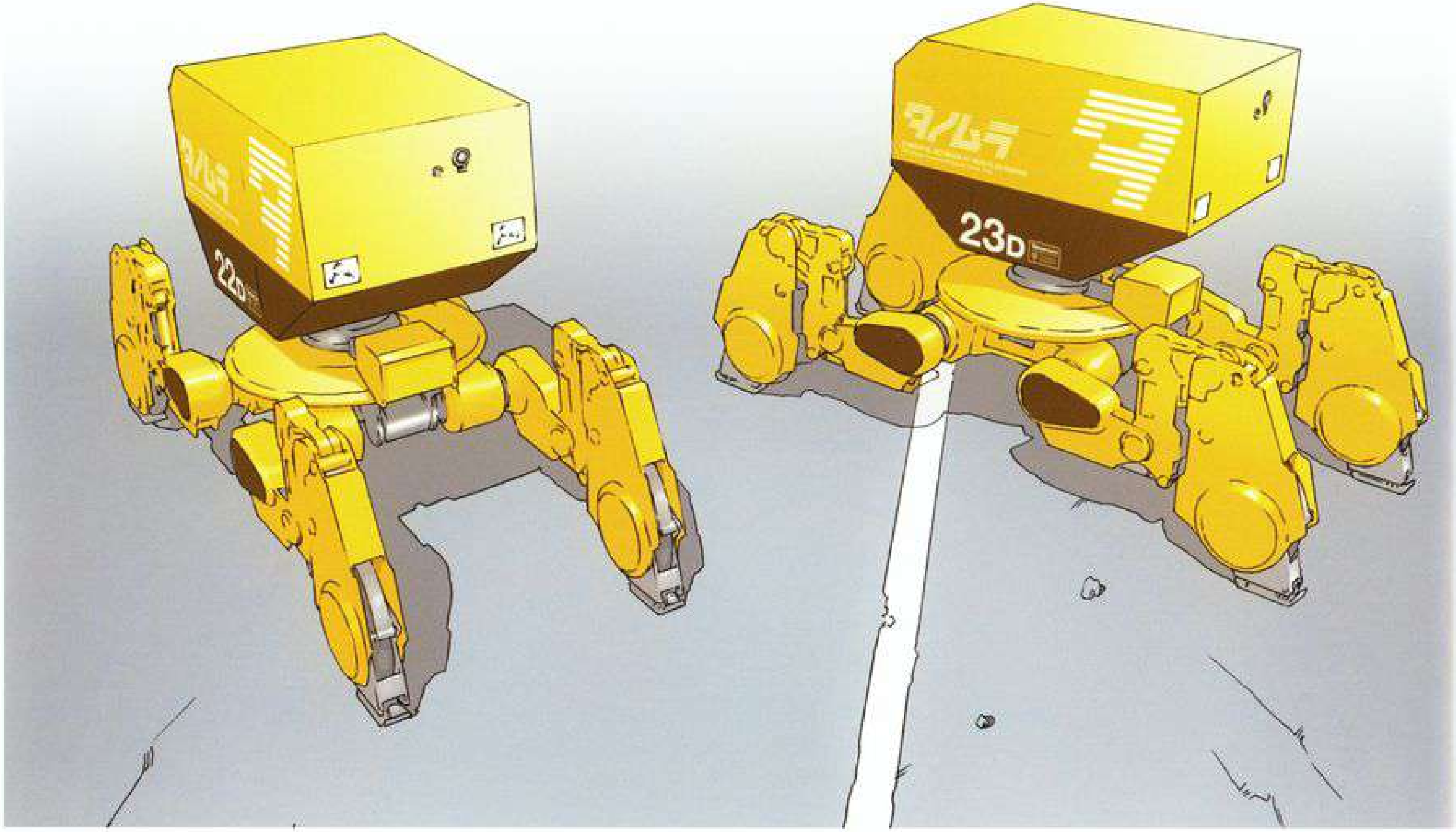


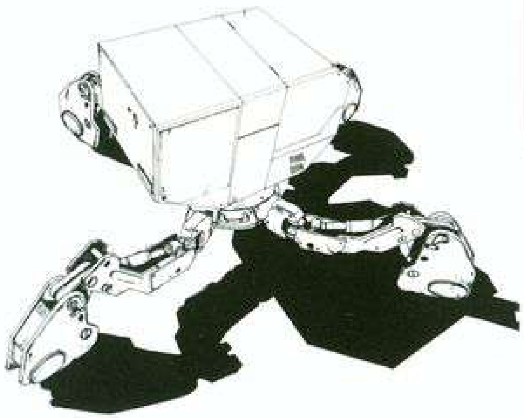
やはりアニメの影響は強いです。子供の頃にリアル志向のロボットアニメを観て、現実味のある描写に刺激を受けました。でもその後、1996年にHONDAの「P2」(※ASIMOの前身機)が動いる姿を見て、アニメ的な考え方でデザインされたロボットと現実のロボットはこうも違うのかと。そのギャップが出雲重機の出発点だったんだと思います。このデルコが最初の機体になりましたが、描くに当って自分で決めたルールは「ストイックに」そして「現実の風景に溶け込むこと」の2点。後者は人々の既視感に訴える方法で実現しようと試みました。

mmji

20WT **Delco-T**

Design:Kentaro"ANI"Fujimoto
Collaboration:Tanomura Corp.



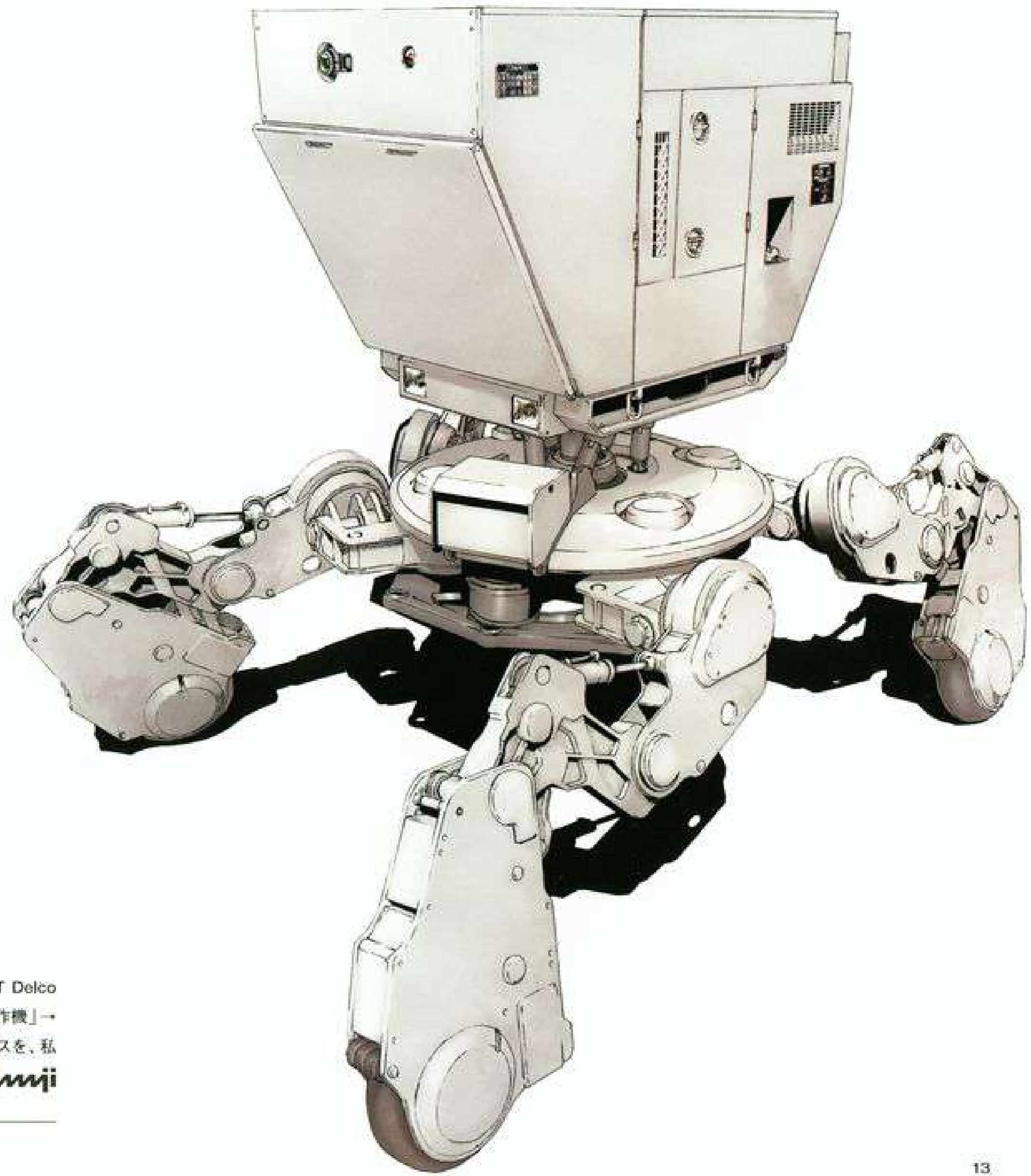


1997年頃、大久保が最も初期に描いたDelco機体である。ダイナミックな動きに重点が置かれ、現在の20WT Delco（量産型）に比べてより"クモ的"な印象だ。 AM

Delcoのデザインに当っては、まずフォルムから入りました。クモというか、昆虫というか、何か人間とは全く異質なもの。あるいは一種の「奇形動物」と言っても良いでしょう。異様な形態をしていながらも興味をそそられる。心に引っ掛かる。そんなカタチを考えました。それでいながら日常の風景の中に突然置いてもおかしくないメカとして活かす。それがチャレンジでした。表面や各パーツのテクスチュアは、本物の重機のカタログ等が参考になりました。特に「KOMATSU」のパンフレットは重宝しました。

Weight:	1,430kg
Length:	345cm (minimum)
	385cm (maximum)
Height:	220cm (minimum)
	260cm (maximum)

19WT **Y-Delco**



1997年頃に描かれた最初の機体が「Delcoのコンセプト画＝新製品」だとするならば、このY-Delcoは商品化に向けてのプロダクション・プロト（量産試作機）に当る。量産機WT20 Delcoより若干大きく、またパーツ構成も複雑である。

「イデルコ」

2002年頃に「鉄騎」の作業を終えまして、得たノウハウで「出雲重機」を再構築しようと思い、その結果出来上がった機体です。その後、「出雲重機」のフィギュア化企画が持ち上がり、"型で作る以上はシンプルに……"といった方向でさらに煮詰めた結果こそ、最初の量産機に当る前頁の20WT Delcoなのです。いわば、「コンセプト画」→「手作りの試作機」→「量産品」という実際の工業製品開発のようなプロセスを、私自身も期せずして踏んでいたことになります。


東京 武蔵野病院
質
買入
まるや

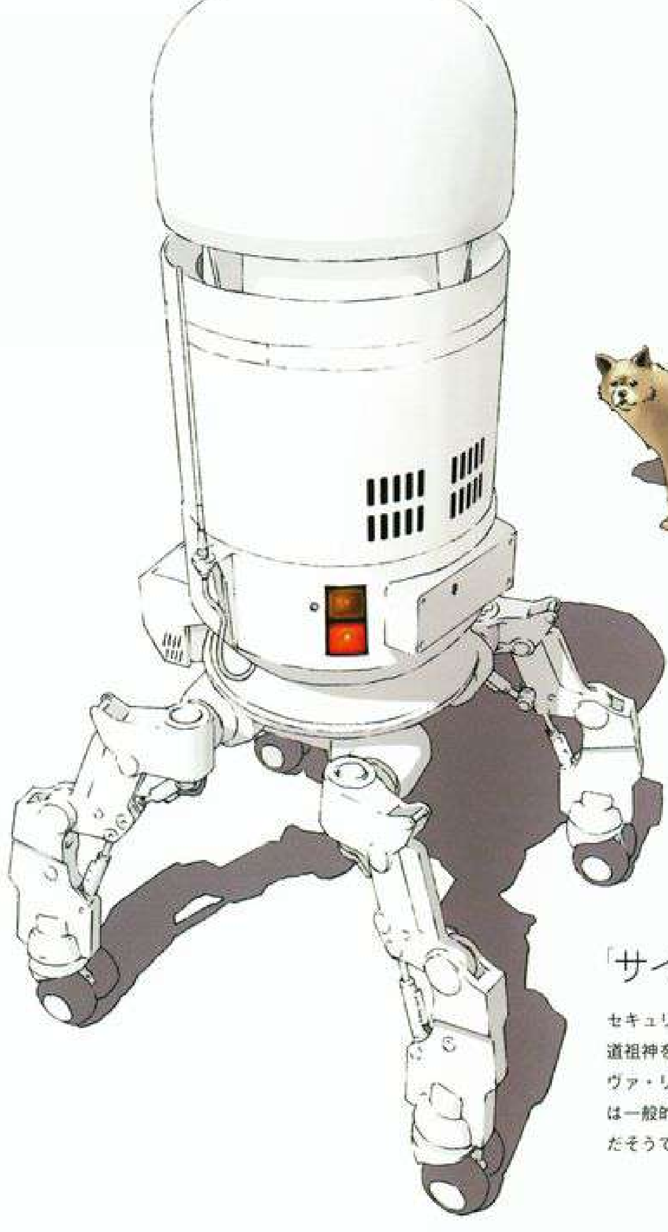


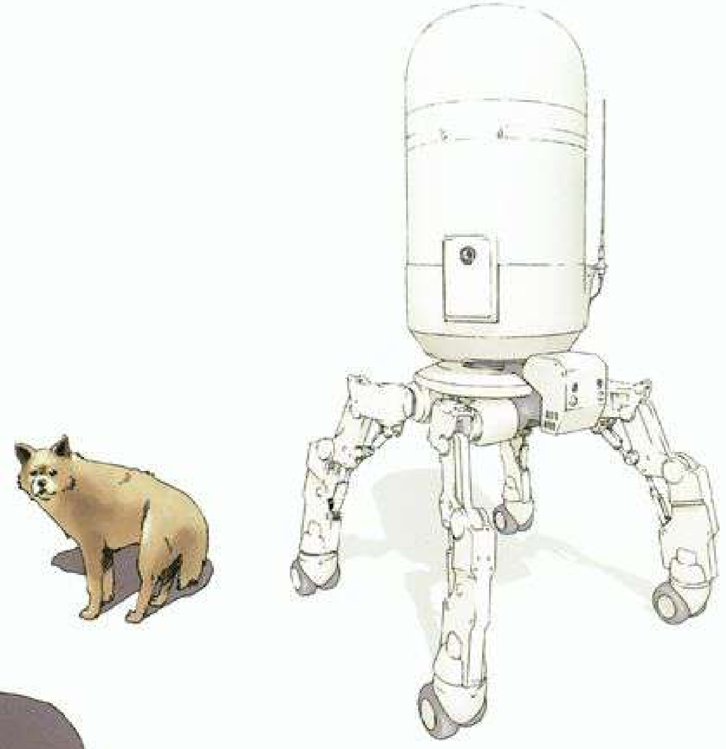
22WT Sai

Weight: 1,360kg
Length: 230cm
Height: 420cm

誰もいない真昼の住宅街に、あたかも道祖神の如く佇む円筒形の姿。それも短い間隔に複数が配置されている。これらはゆっくりと移動しているのか？　それともその場から動かないのか？　無音のままなのか？　ある種の電子音を発するのか？　それとも人の声で話しかけてくるのか？　そもそもこの光景自体がありふれた日常なのか？　それとも緊急事態なのだろうか？　風景に溶け込む、自然に馴染む、という点はいつもの出雲重機製品。しかし思いがけない場所でふと出会ったお地蔵様に心を持って行かれるあの瞬間のような、不思議な胸騒ぎ。

円筒形の頭部ユニットがまず目を惹く。内部からは明らかに、「何かが放たれている」という印象を受ける。それはある種の電波か波動のようなものだろうが、頂上の丸い部分は僅かだが開くようでもあり、冷却ガスや煙のようなものを蒸散させると推察される。正面の一つ目センサー（？）は、この機体の「非人間的要素＝人類とは一線を画する存在である」ことの自己主張なのか？　20WT Delcoの流れを汲みながらも車輪が小型化され、より繊細にアレンジされた足先からは、あらゆる方向に神経質なほど細やかに移動する様が連想される。サイドに突き立つアンテナも気になる。 AU





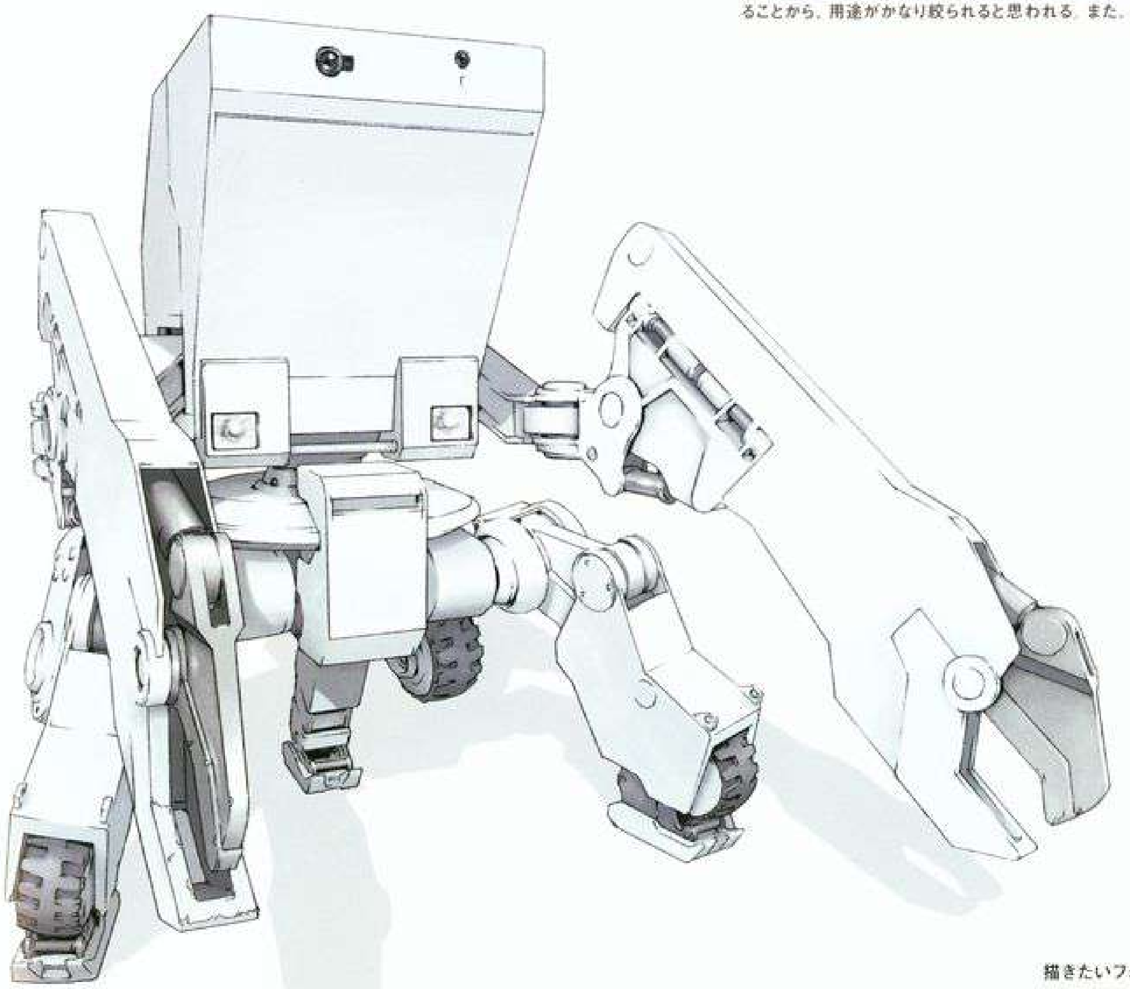
「サイ」

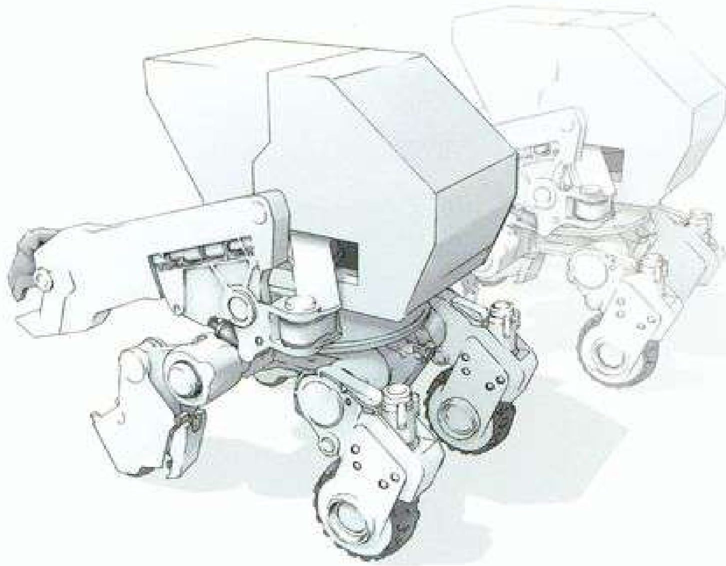
セキュリティロボットのようなものをイメージしてデザインしようと思い、転じて道祖神をモチーフとした機体です。円筒形にそそりたつフォルムはヒンズー教のシヴァ・リンガにも通じますが、“男根の象徴”であるという説があります。道祖神とは一般的に、峠や辻・村境などの道端にあって、悪霊や疫病などを防ぐ自然神なのだそうです。機体名のSaiは「塞（さい／ふさぐ）」に由来しています。 uuji

Weight:	1,980kg
Length:	305cm
Height:	240cm

81WT **Catam**

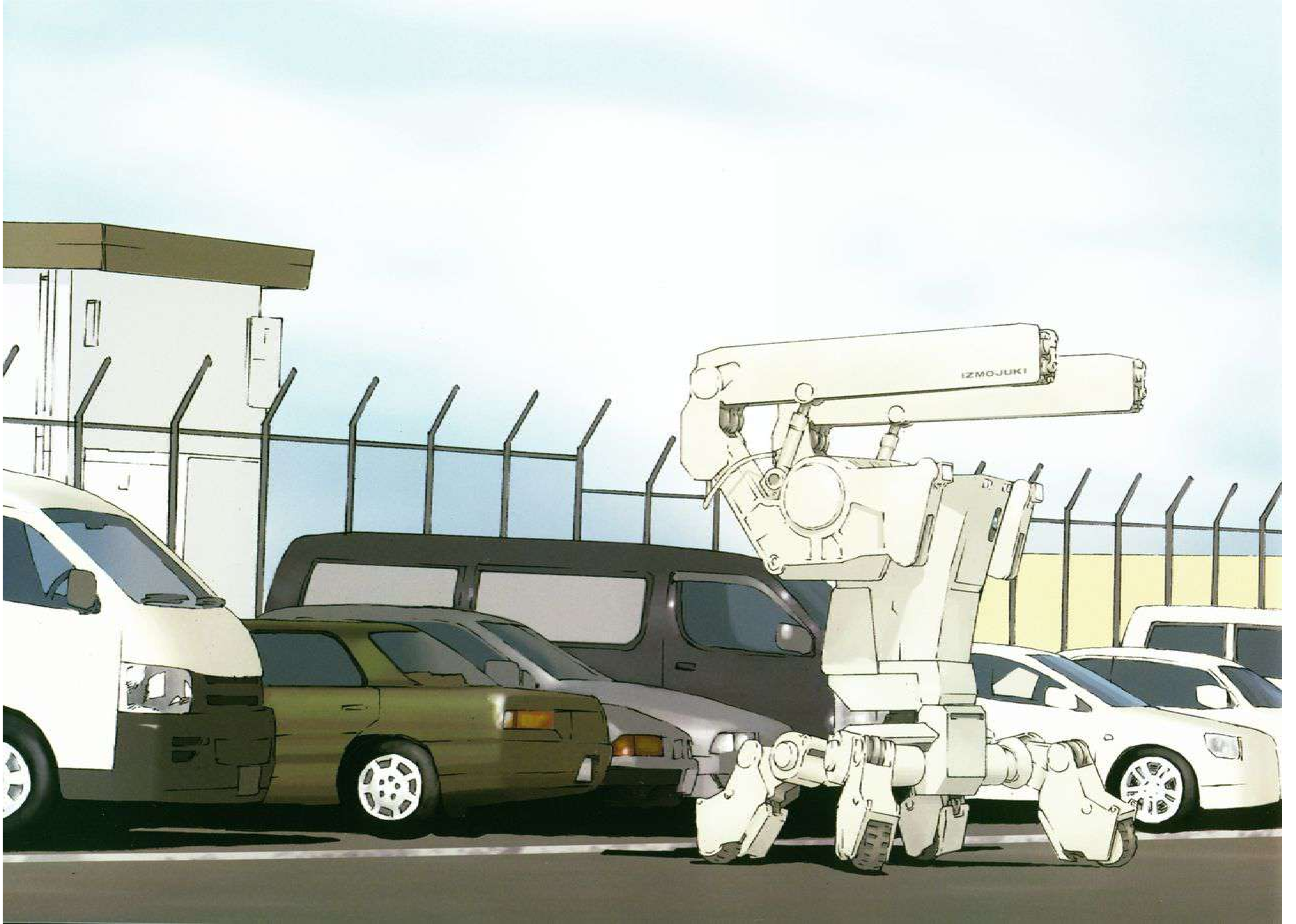
ポスター展「弐千大阪」参加に際して「カニ道楽」をモチーフとしてデザインされた機体だが、どちらかといえば水揚げされたカニ（食品）よりも、実際に海に生きているカニ（生体）のイメージが濃い。深海の底深く、一心不乱に餌をついばんでいる様子を連想させる。本機もまた、黙々と仕事をこなすのだろう。20WT Delcoに大型カッターアームを取り付けたデザイン。建物の破壊用、もしくは事故車両からの人身救出用、あるいは氷を砕く目的で作られたのか。ヘッドランプ、テールランプが省かれていることから、用途がかなり絞られると思われる。また、Delco系としては初となる、「前後違うデザインの脚」が使われている点にも注目したい。 AU





「カタム」

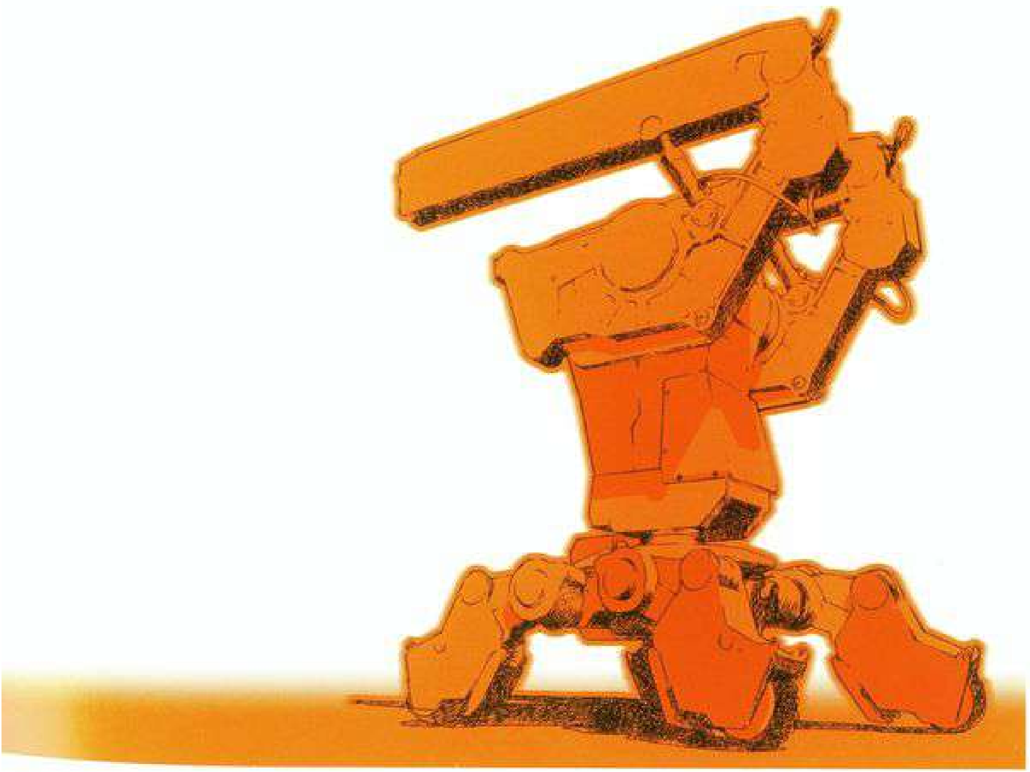
描きたいフォルムに実際の重機のパーツをサンプリング&コラージュする、という方法で出雲重機の機体は出来ていきますが、「KOMATSU」などの国産メーカーのパーツを使うと非常にリアリティが出ます。逆にちょっとキャッチーに、見る人に“何だこりゃ!?”というインパクトを与えたい時にはヨーロッパの重機メーカーを参考にします。同じ目的でもかなりデザインの異なる機械があったりして、日本の会社との発想の違いを感じます。機械工学的な知識はありませんが、DEMAG社やWirtgen社の製品には心惹かれます。

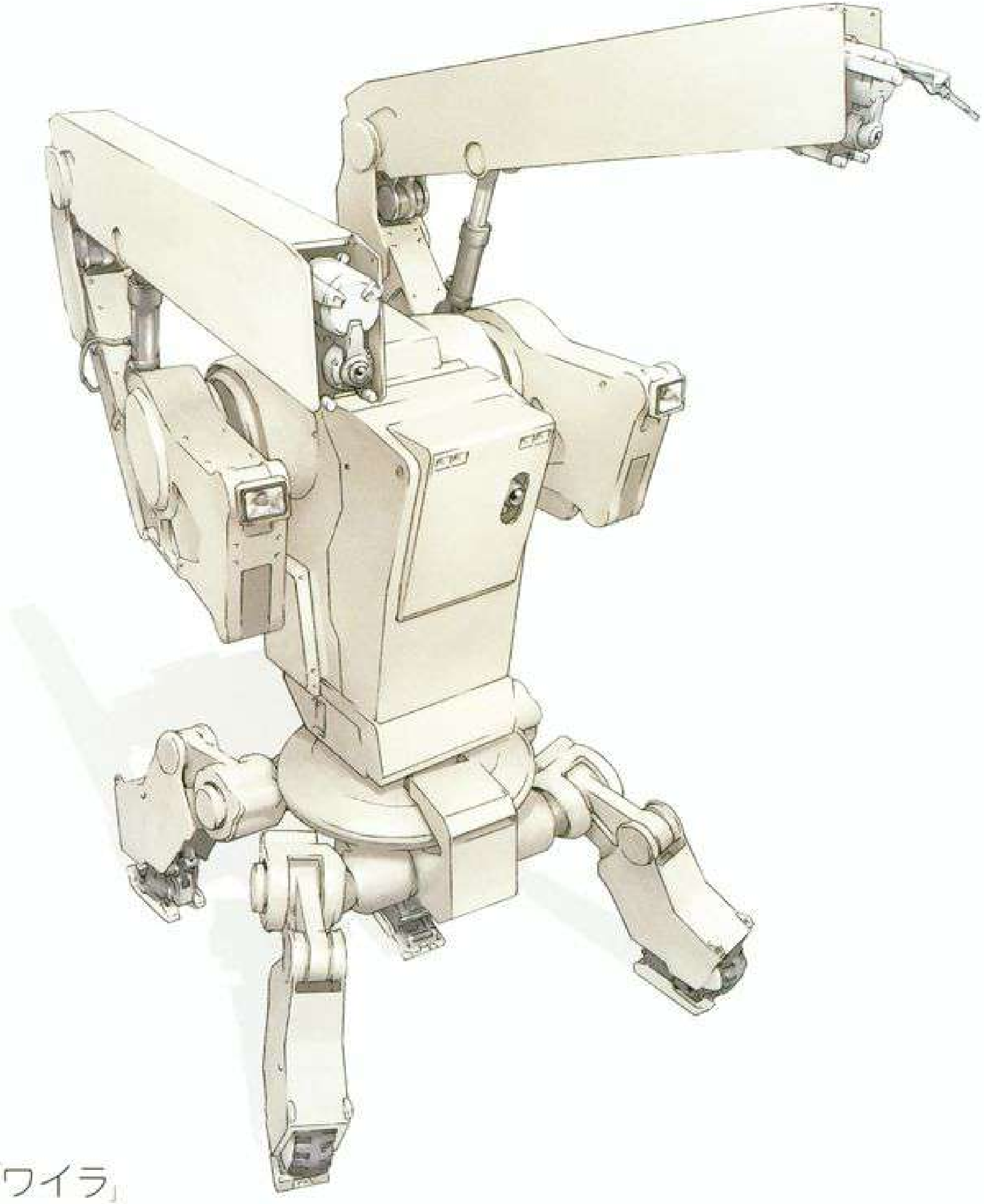

IZMOJUKI

Weight: 2,788kg
Length: 275cm
Height: 360cm

28W2G **Waira**

20WT Delcoからのバリエーションと思われる機体. 頭部ユニットが縦長デザインに変更され, 肩から長いアームが伸びている. このアームは上下に回転するようであり, また油圧シリンダーによってかなりの荷重にも耐えられると見られる. また, ヘッドライトはアーム基部に付いており, 常に作業エリアを明るく照らすことが可能だろう. アーム先端には何かの射出器, あるいはマニュピレーター状のものが見られるが, 様々なタイプに換装可能なのではないか? AU





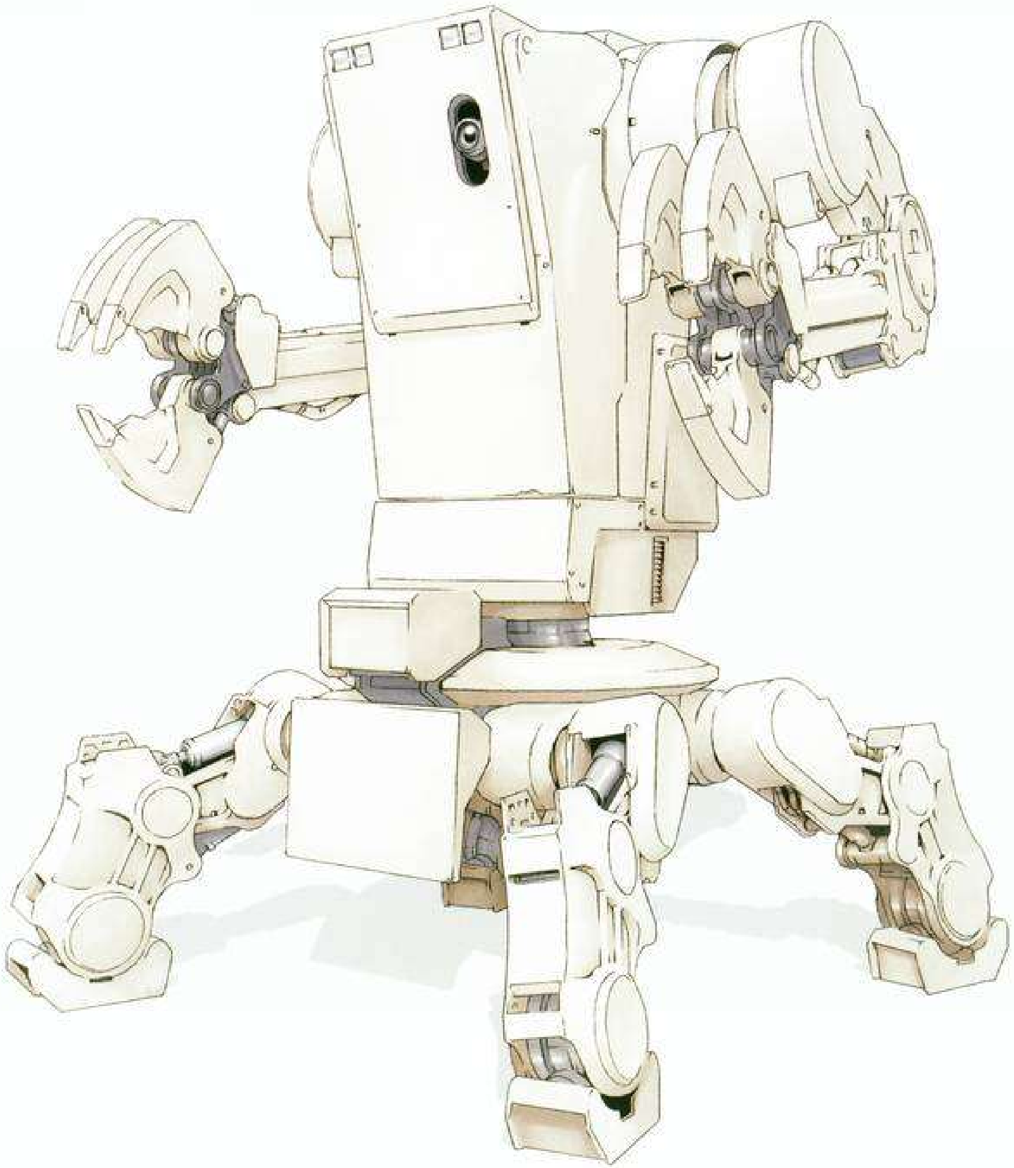
「ワイラ」

発足当時(1998年頃)の出雲重機はウェアブランドでした。その頃にTシャツにプリントするイラスト用にデザインした機体です。フォルムとしてはカノン砲を背負ったイメージですね。今でこそ出雲重機のポリシーとして"出雲重機の名の下で兵器は描かない"ことに決めていますが、やはり最初は売ることに必死だったのであからさまに移動砲台でした。再構築時に作業肢に改めましたが、フォルムが武器、兵器を連想させるようです。

mji

28W2G/A **Gawri**

Weight:	3,200kg
Length:	245cm
Height:	287.5cm
Arm length:	305cm (maximum)

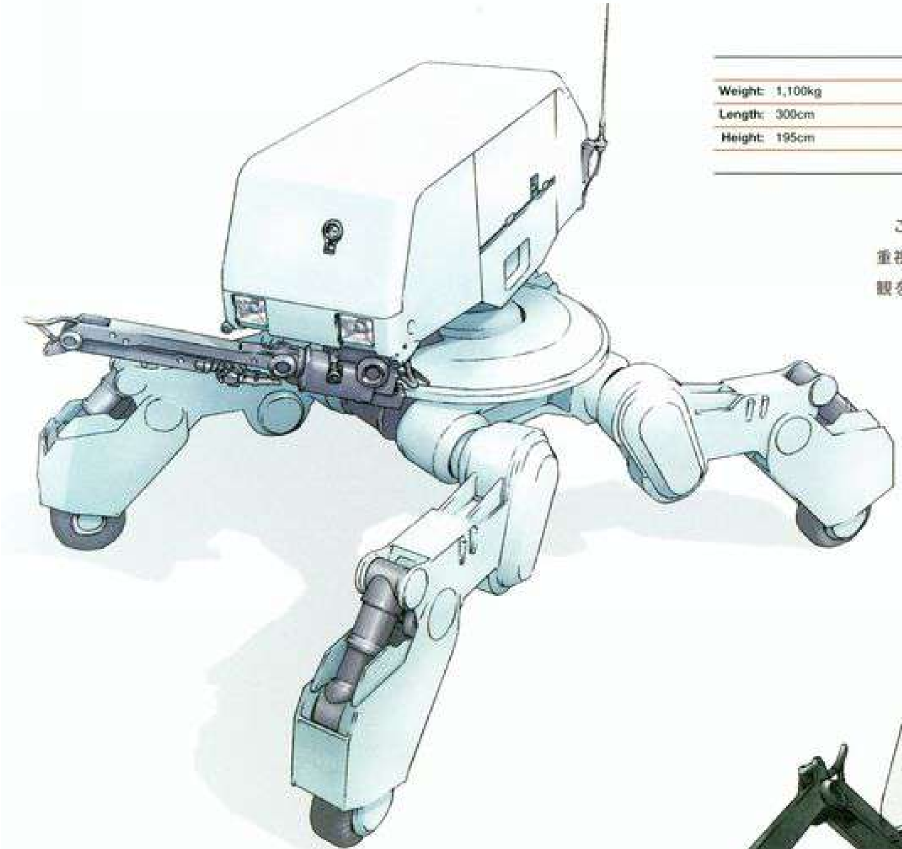


縦長の頭部ユニットは基幹モデル、20WT Delcoの面影をほとんど残していない。脚も足先のタイヤが省かれた歩行モードのみのデザインとなっており、他とは一線を画している。いかにもパワフルなアームだが、その形状から用途は限られるだろう。本体基部前方の四角いボックス部分が大型化され、「化粧まわし」のようにも見える。 AU

「ガウリ」

大好きな映画、「Monsters, Inc.」の主役"サリー"へのオマージュ作品ですね。全体のフォルムも、大きくてつぶらな一つ目も。"優しくて力持ち"なあの雰囲気を出雲重機的な解釈で翻案したくて、色々と工夫をこらしました。アーム先端のデザインには、実際に建物の解体現場で使用されている油圧ショベル用の先端アタッチメント（カッターやクランパーなど）を参考にしています。

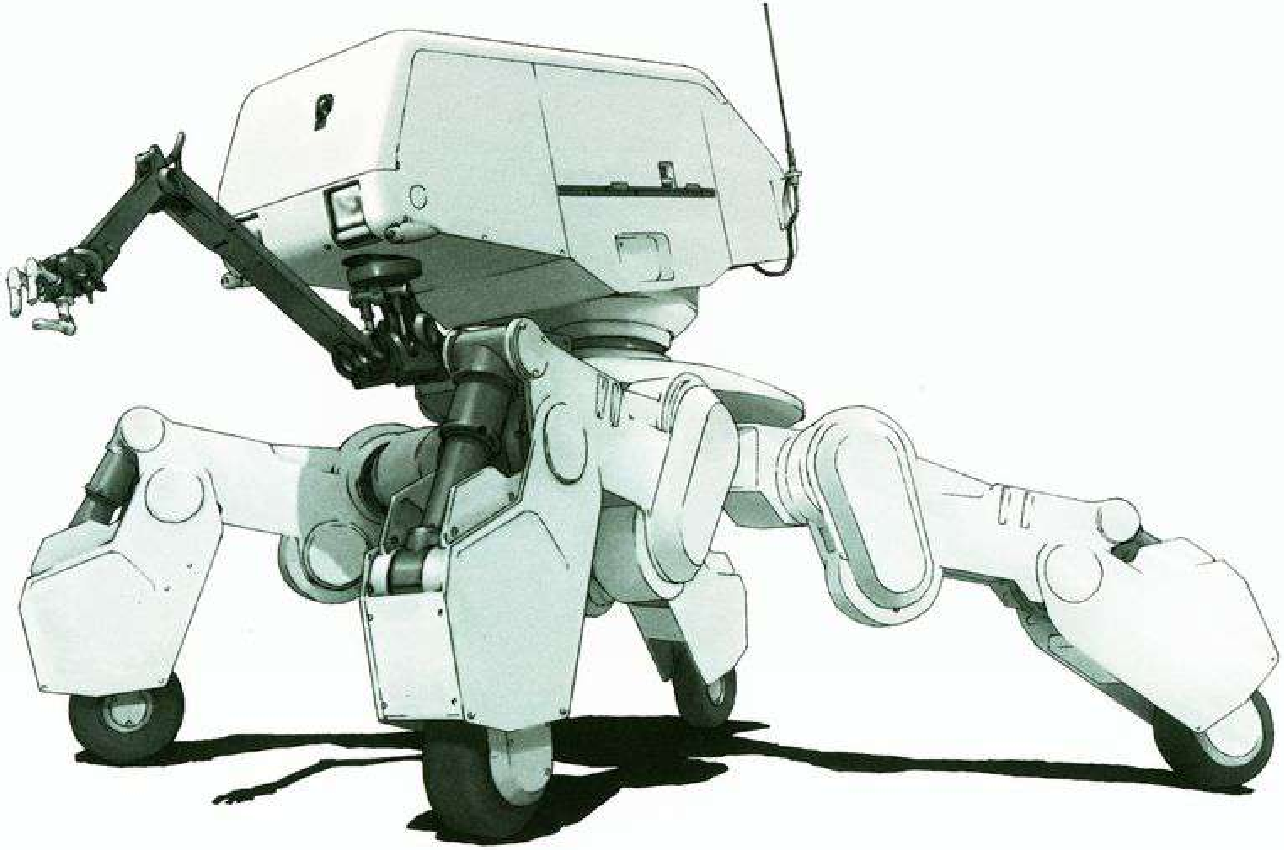
umji



Weight:	1,100kg
Length:	300cm
Height:	195cm

23GN3 **Kab-Kiri**

これも20WT Delcoからのバリエーションだが、頭部ユニットはより小型となり、下半身は基部に近い関節が大型になっているなど、より走行性を重視したスタイルとなっている。最大の特徴とも言えるのがフロントに付いたマニュピレーター。複雑な作業をこなすためか、人間の手と良く似た外観を有している。また、本体後部にはアンテナが立っている。機体名称の「カブキリ」は、"妖怪の名前"に由来している。



「カブキリ」

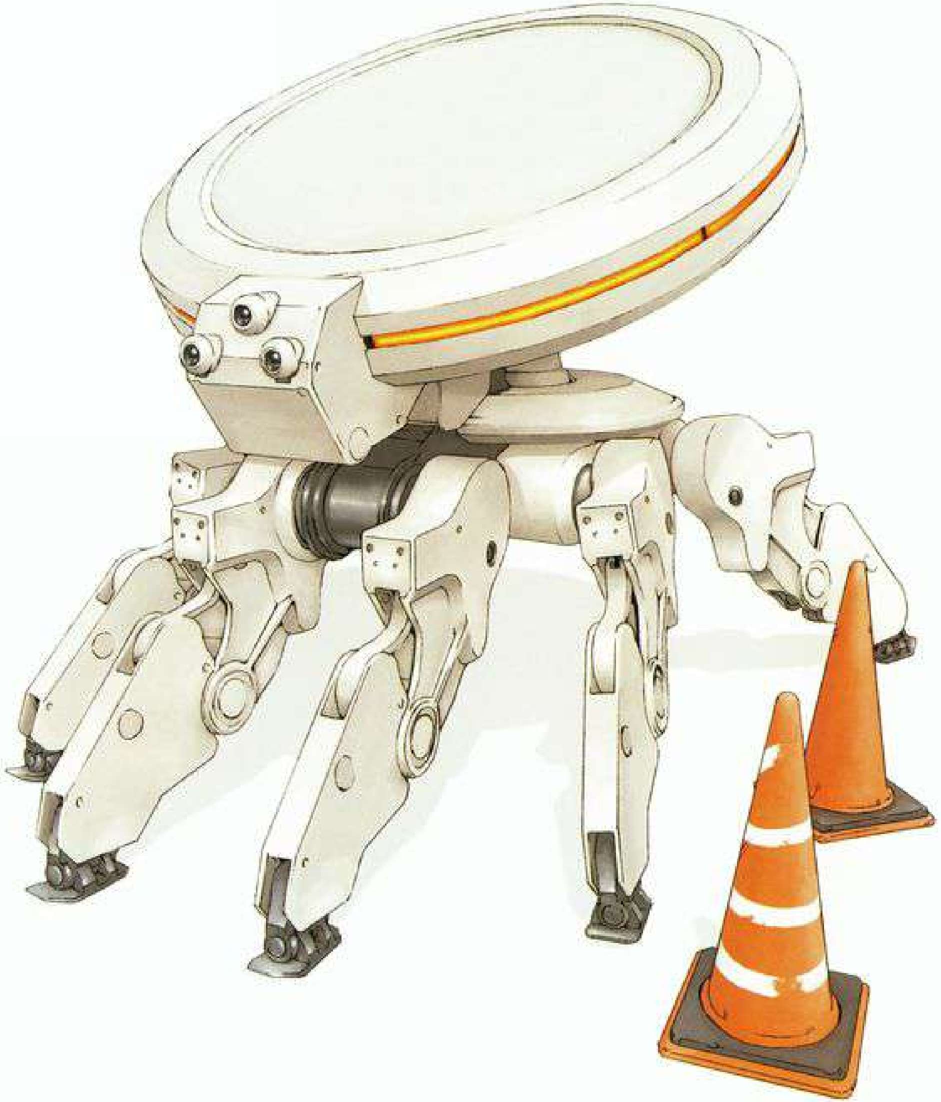
これもウェアブランドだった頃にデザインした機体です。やはり若い男性に受けが良い、「武器モノ」の名残りですね。マニピュレーターは当初、攻撃ヘリ「AH-63アパッチ」の機首に搭載されているフロント・ガンを参考にした3連装機銃が装備されていました。再構築に伴ってフォルムの格好良さをそのままに、マニピュレーターに変更しました。


会社カネイチ
クリーニング
丸井
住まいの相談は当店へ
―この街のことならおまかせください―
不動産なび
KANEICHI
接骨院

S2WT Kamdo

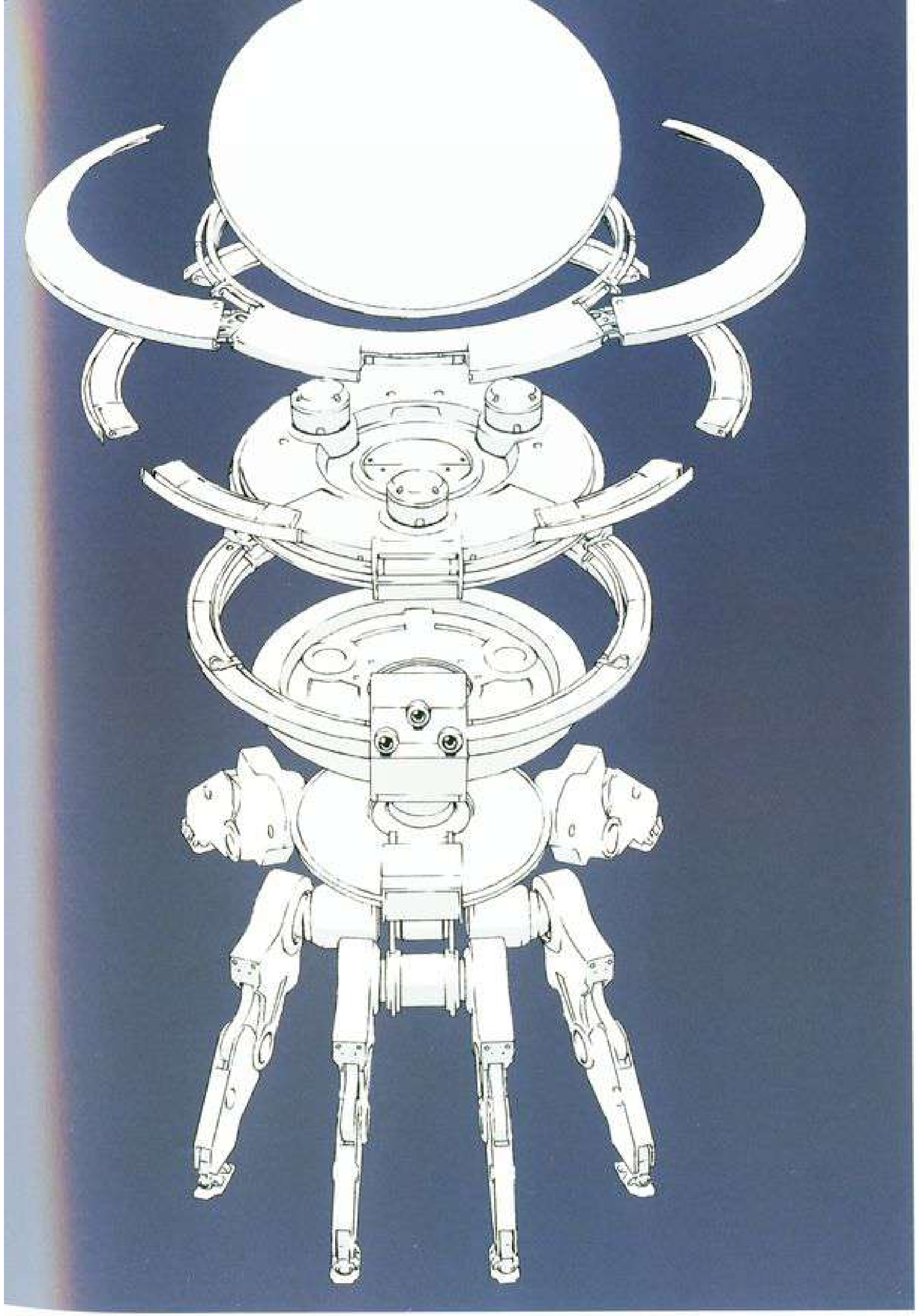
Weight: 1,000kg
Length: 230cm
Height: 295cm

車輪が廃止されたこの機体は、人間が歩く時のその速さで、街の隅々、どこまでも廻っている。3つの目は、ここに暮らす一人一人の生活を静かに見守っているのだろう。脚が6本に増えたが、そのうち2本は「手」なのかも。何か役に立つことができるのだろうか？　街が寝静まる夜更けや明け方、疲れて眠る人々の邪魔をしないよう、6脚全部を上手に使って音を立てずに路地を抜けていた。頭部の継ぎ目から優しく、楽しげな光も出ていたが、人々の暮らしの邪魔はしない明るさ。広場にいると"お前、飛びそうだな!"と子供たちによく言われているが、多分それはない。でもこいつの頭の円盤にはきっと、もっとイイものが詰まってるんじゃないかな?



20WT Delco系よりさらに多目的、量産的、かつファミリーユース的に進化した「次世代型大衆モデル」という位置付け。各パーツ構成は製品としての生産性、汎用性をより高める方向でデザインされている。周辺部にイルミネーションをあしらった円盤型の頭部、フロントセンサーは昆虫を思わせる三つ目、歩行のみに機能を絞った6本脚など、各部デザインはよりSF的要素を深めている。また、カラーバリエーションやマーキングも想定している。サンプリングは重機のみならず、家電からも行われている。特に昭和初期頃の大型扇風機に見られた首振り機構からのトレースなど、大久保の「機械関節フェチ」ぶりが遺憾なく発揮されている。 AM

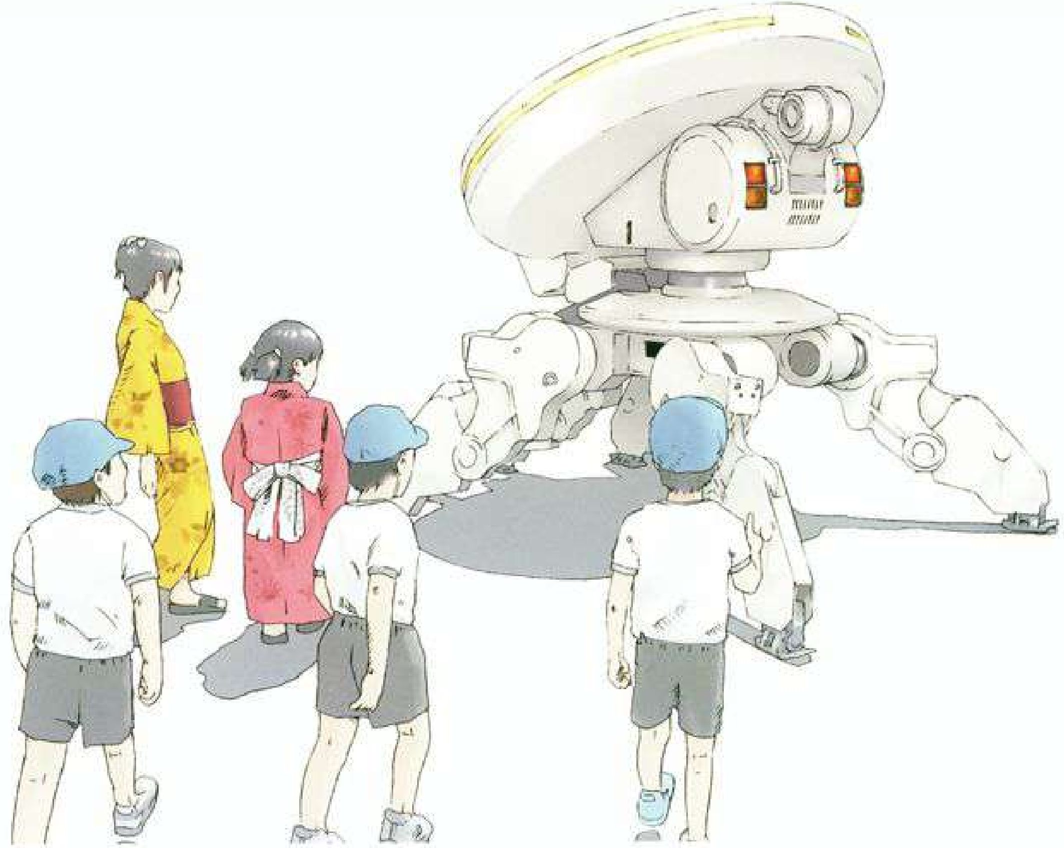




カムド　S2WT **Kamdo**

20WT系で試みていた"日常的な風景に馴染むデザイン"という初期の目標に対して、このS2WTではより大胆に形状の限界に挑戦しようと思いました。いわば、"フィクションの度合いを深めた"わけです。脚部は、やはりクモや昆虫がベースになっていますが、円盤状の頭や細長い発光部は「STAR TREK」のU.S.S.エンタープライズ号っぽいですね。また、「攻殻機動隊」のフチコマとの類似性をよく指摘されます。士郎正宗作品は中学生の頃から親しんでいますから、その影響を無意識に受けている可能性は否定しません。でも実際のところ、このカタチの基礎にしたのは「PREDATOR」のマスクだったと思います。また、出雲重機としては初めて「街の風景との合成写真」に挑戦した機体でもあります。背景を下町に設定したのは、条件としてとても厳しそうに思えたので。

Kenji



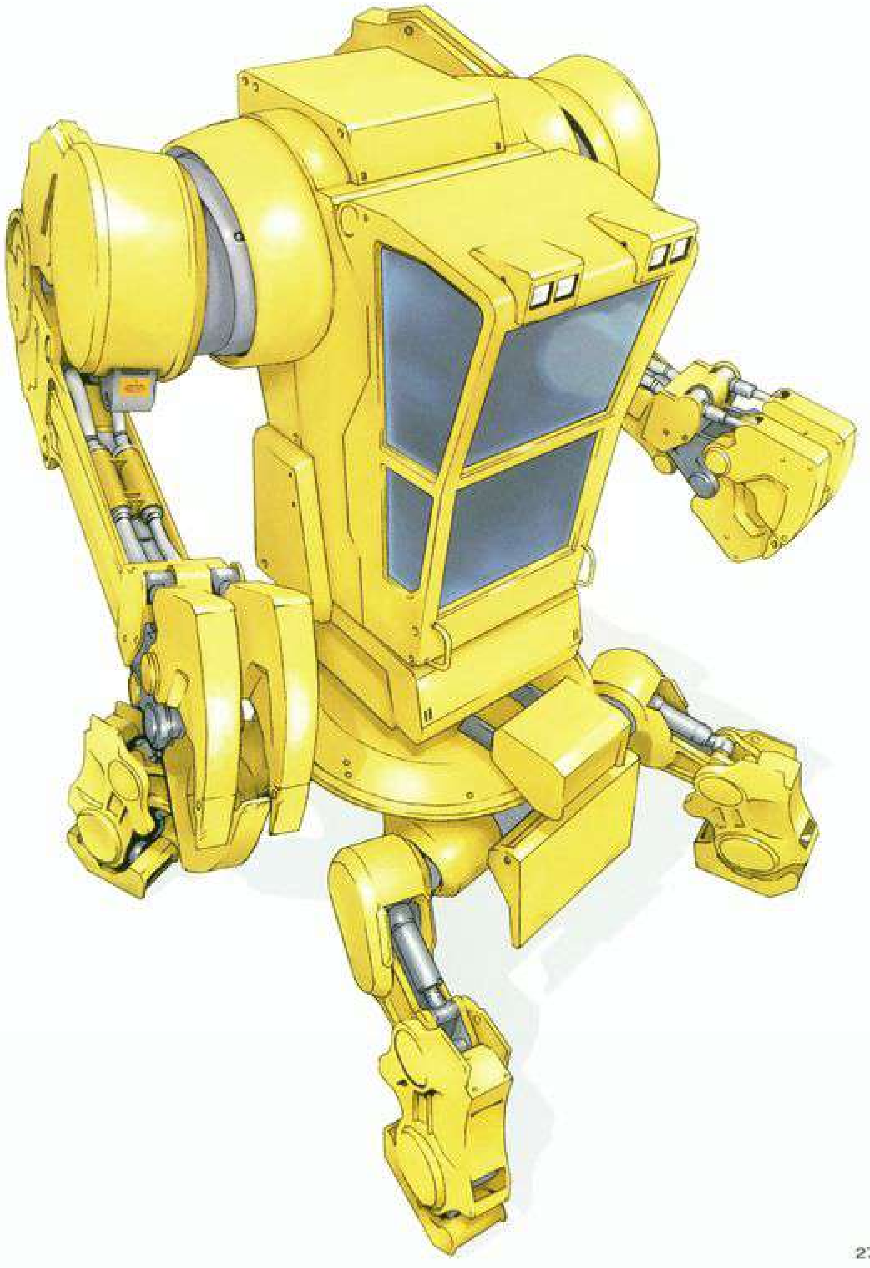


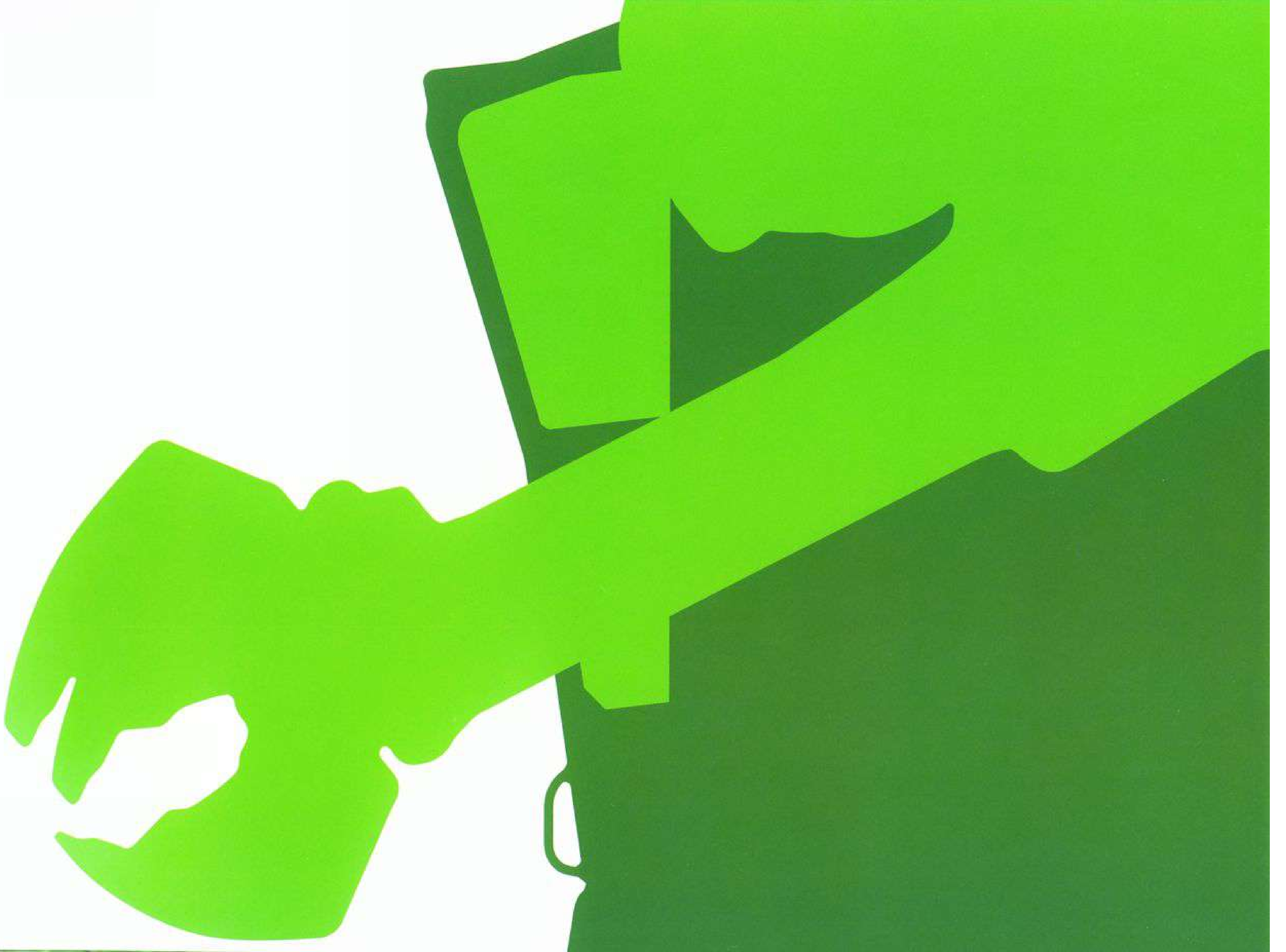
28W2G/D Ope-Gawri

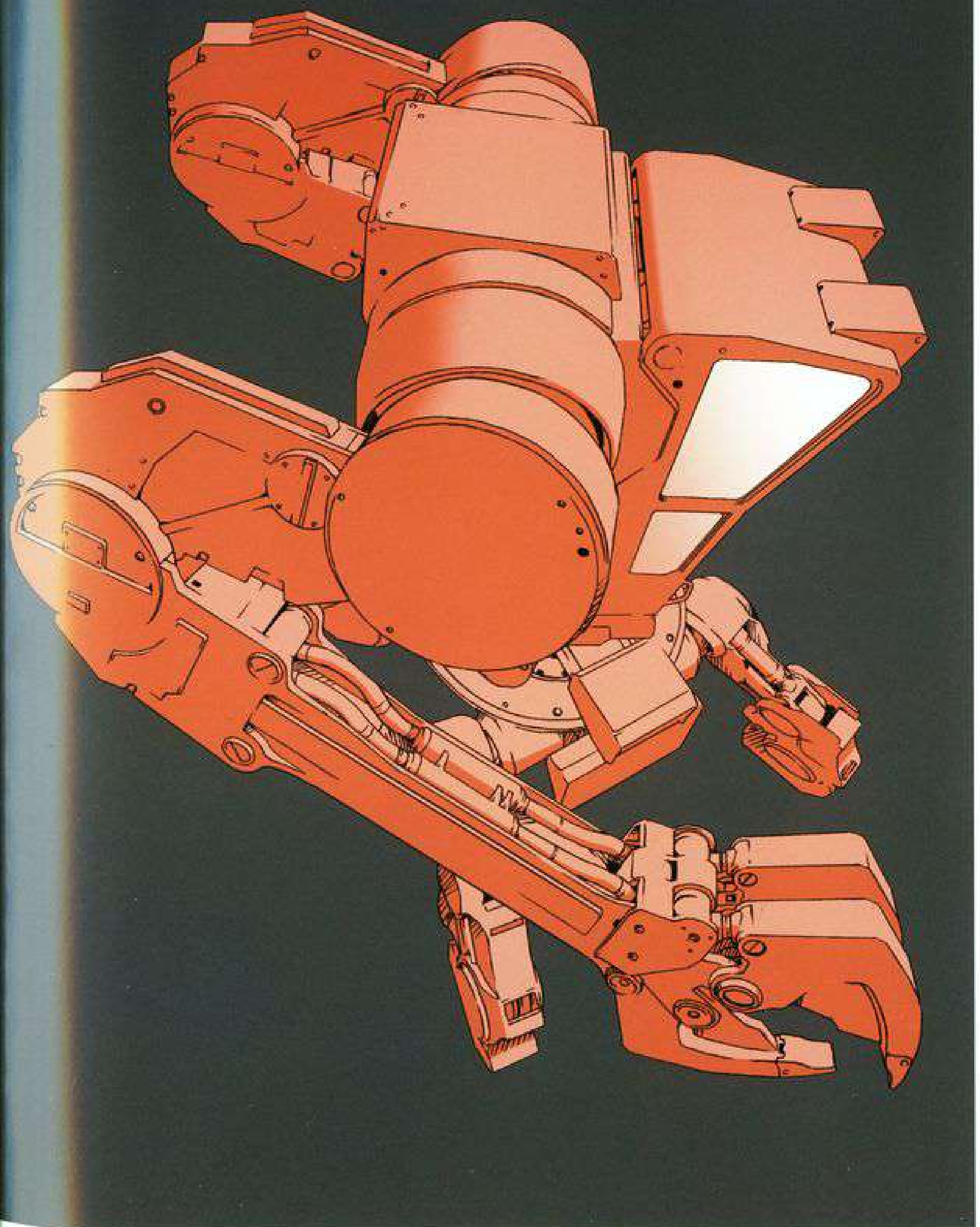
Weight:	4,120kg
Length:	245cm
Height:	287.5cm
Arm length:	305cm (maximum)

森を抜ける一本道で出会った。力強いアームを延ばしたり縮めたり。時々上体を傾けたり。一心不乱に働いている。キャタピラや車輪の付いた普通の重機と違い、4本脚を巧みに動かして移動する。その足取りは滑らかでどこか優しい。森を通る唯一の道を傷めぬように。あるいは路肩の草花を踏まないように。でも一体、何をしていたのか？　倒木をどけていたのかもしれないし、水を引くための溝を掘っていたのかもしれない。でも"何か森のためになる仕事をしている"と信じさせる雰囲気があった。胴体中央にコックピットを発見した時、運転している人を羨ましく思った。

出雲重機としては異色ともいえる、人が乗って操縦するオペレーション・タイプの機体。28W2G/A Gawri（ガウリ）のフォルムはそのままに、現存する重機（KOMATSU製等）からのサンプリングを行い、リアルな質感や重量感の転写を試みている。いかにも建設機械らしい雰囲気を演出するため、カラーリングにも敢えてステレオタイプな「黄色」を踏襲。いわゆる"ダサかっこ良さ"を表現している。 AV

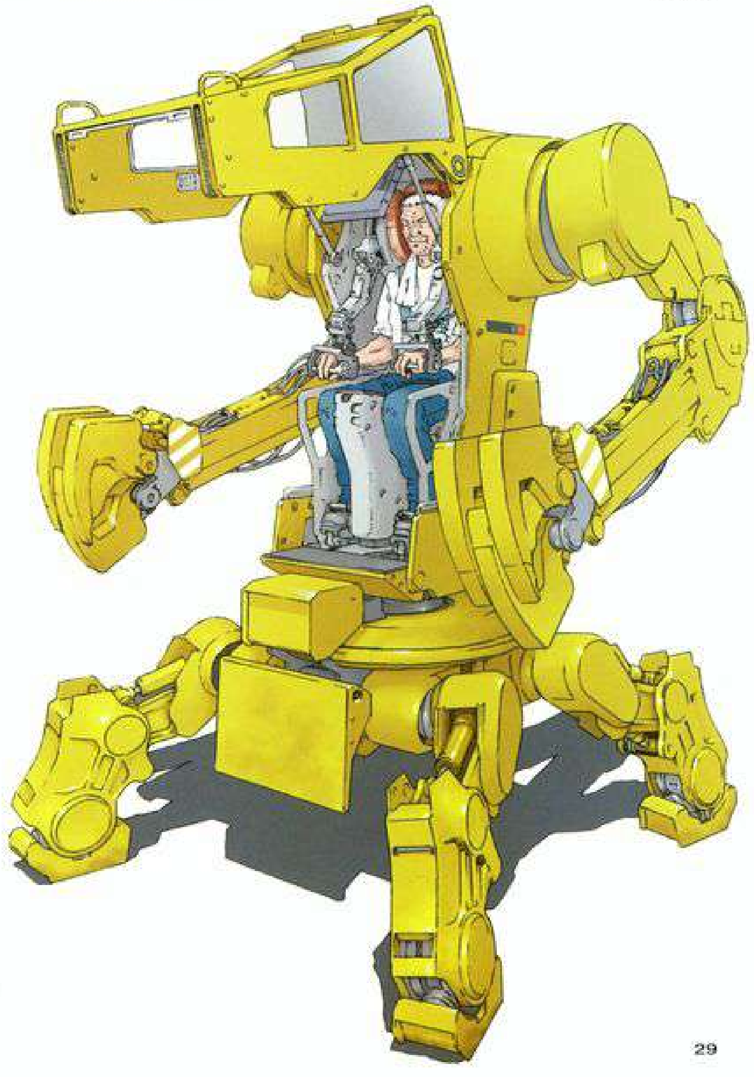


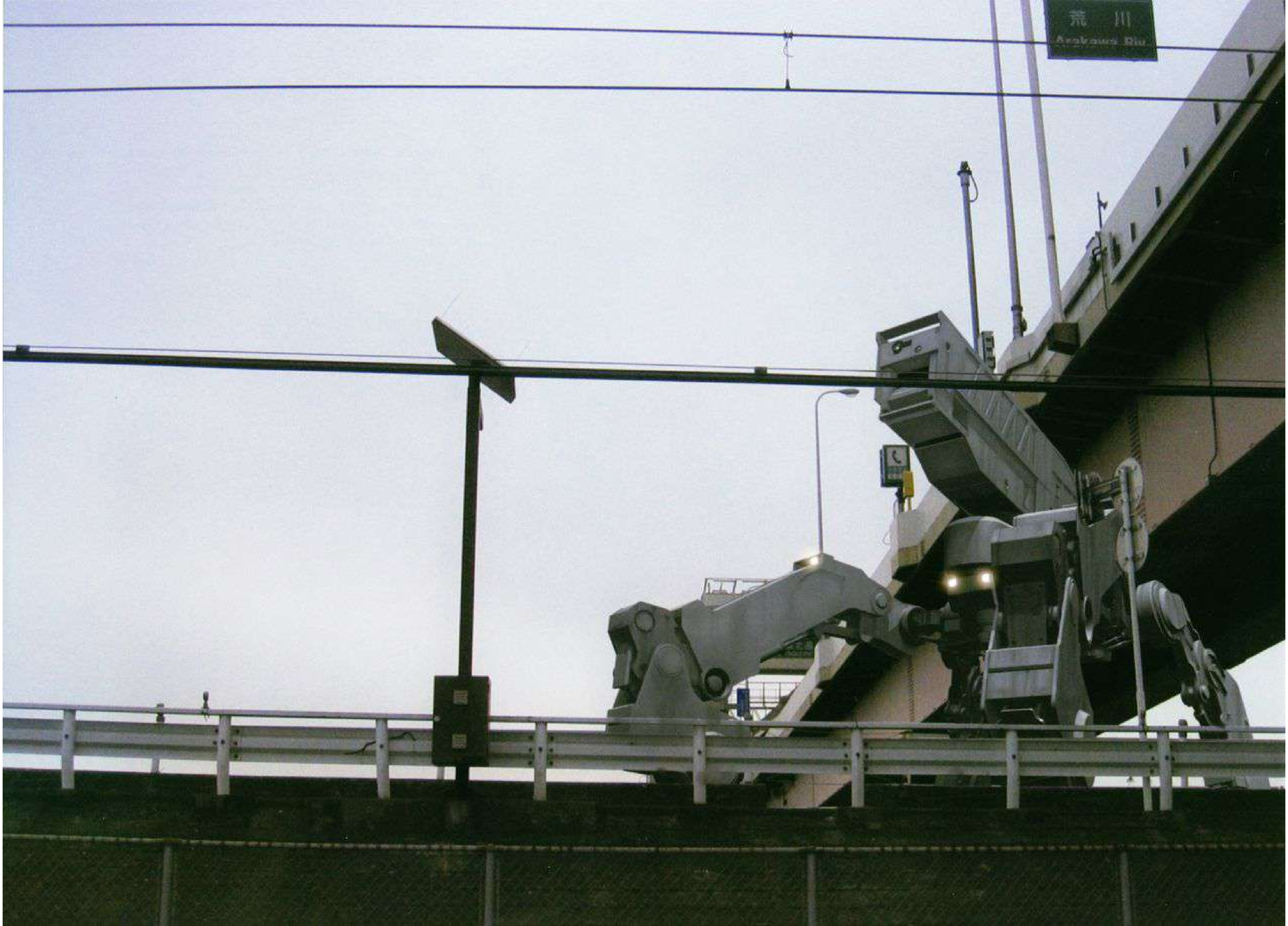




オペ-ガウリ　28W2G/D **Ope-Gawri**

28W2G/A Gauri（ガウリ）を描いた後に"これは自分で動かしてみたい"と単純に思いまして、胴体部を半ば強引にキャブに換装しました。『ALIENS』のパワーローダーだったり『The Matrix Revolutions』のAPUみたいなガジェットが好きで、影響が大きいです。ですから一連の出雲重機製品の中でも、この28W2G/D Ope-Gauri（オペ-ガウリ）は最も設定や背景がありそうな仕上がりになっていますね。動かない張りボテでも良いから、実物大で作って庭に置きたい……そんな想いを込めて描きました。実際に高さ20mのクレーンの操縦席に乗る機会があったのですが、本当に怖かった。ロボットを操縦するなら全高20mの直立歩行ロボットみたいなものよりも、この機体ぐらいの大きさが丁度良いな、と思います。個人的に。

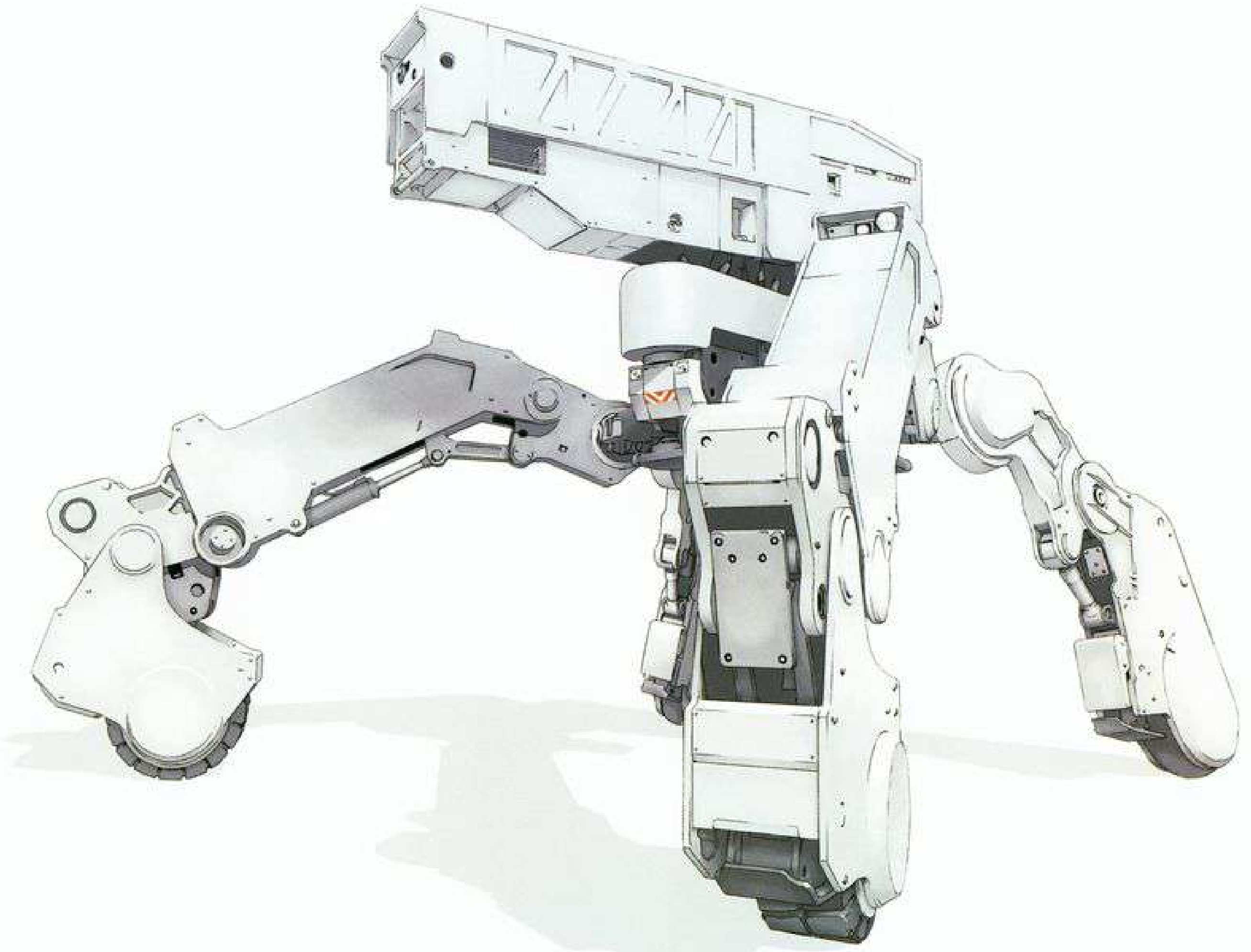



荒 川

30WT Doton

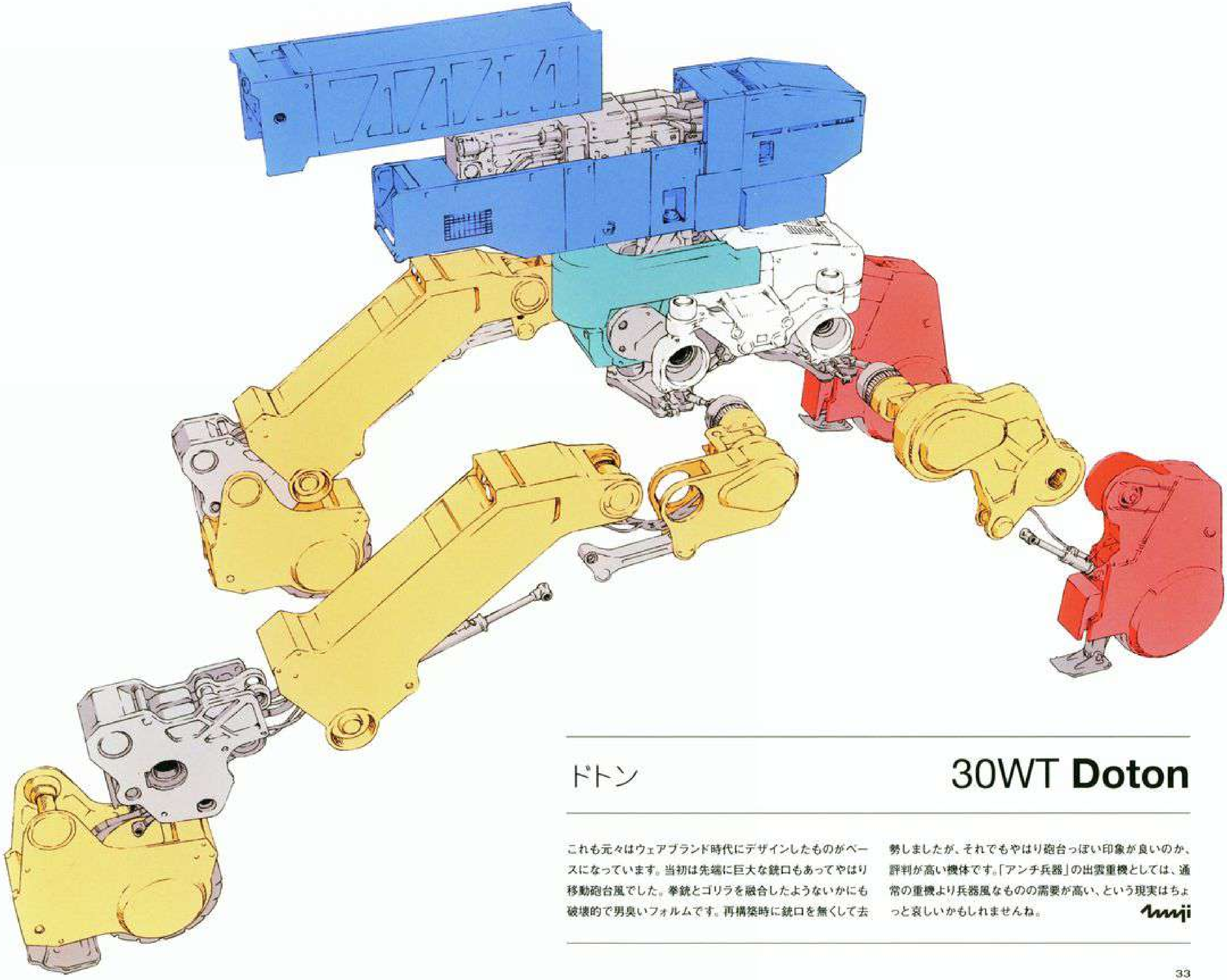
Weight:	22,950kg
Length:	910cm
Height:	570cm

頭部を地面と平行に寝かせ、前後の脚を畳んだ屈曲姿勢のまま、機械は意思を持つかのように疾走し、やがてそれのみが知る目的地付近で静かに停止した。後続車の運転手たちはなぜか不安に駆られたよう。怒ったようにタイヤを軋らせながら追い越し、後ろも見ずに走り去った。やがて巨体は静かに唸り、四肢がゆっくりと、しかし力強く開いて立ち上がる。そして長い頭部が曇天の空を見上げた。人々の視線もそれが見上げる空を彷徨う。ますます鉛色が濃くなる雲行き。遠くで雷鳴も低く響く。今から何かが起こるのか？　それとも、これがあるために何も起こらないのか？



20TW系をそのまま大型化したかのような下半身に、砲塔とも、ミサイル収納部分とも、あるいは伸縮式のハシゴが収まっているとも取れる細長い大型頭部がドッシリと取り付けられた威容は圧巻。後に派生型をデザインすることを当初から想定し、初期段階から3D設計が採用された機体でもある。事実、本機の車輪やシリンダー、各部のライト等、パーツの多くが他の出雲重機製品に流用されている。大久保の頭の中では大型機械メーカーとしての「生産効率」や、「コスト意識」までもが、実際の経営者のように構築されている。 AM





ドトン　30WT **Doton**

これも元々はウェアブランド時代にデザインしたものがベースになっています。当初は先端に巨大な銃口もあってやはり移動砲台風でした。拳銃とゴリラを融合したようないかにも破壊的で男臭いフォルムです。再構築時に銃口を無くして去勢しましたが、それでもやはり砲台っぽい印象が良いのか、評判が高い機体です。「アンチ兵器」の出雲重機としては、通常の重機より兵器風なものの需要が高い、という現実はちょっと哀しいかもしれませんね。

mji

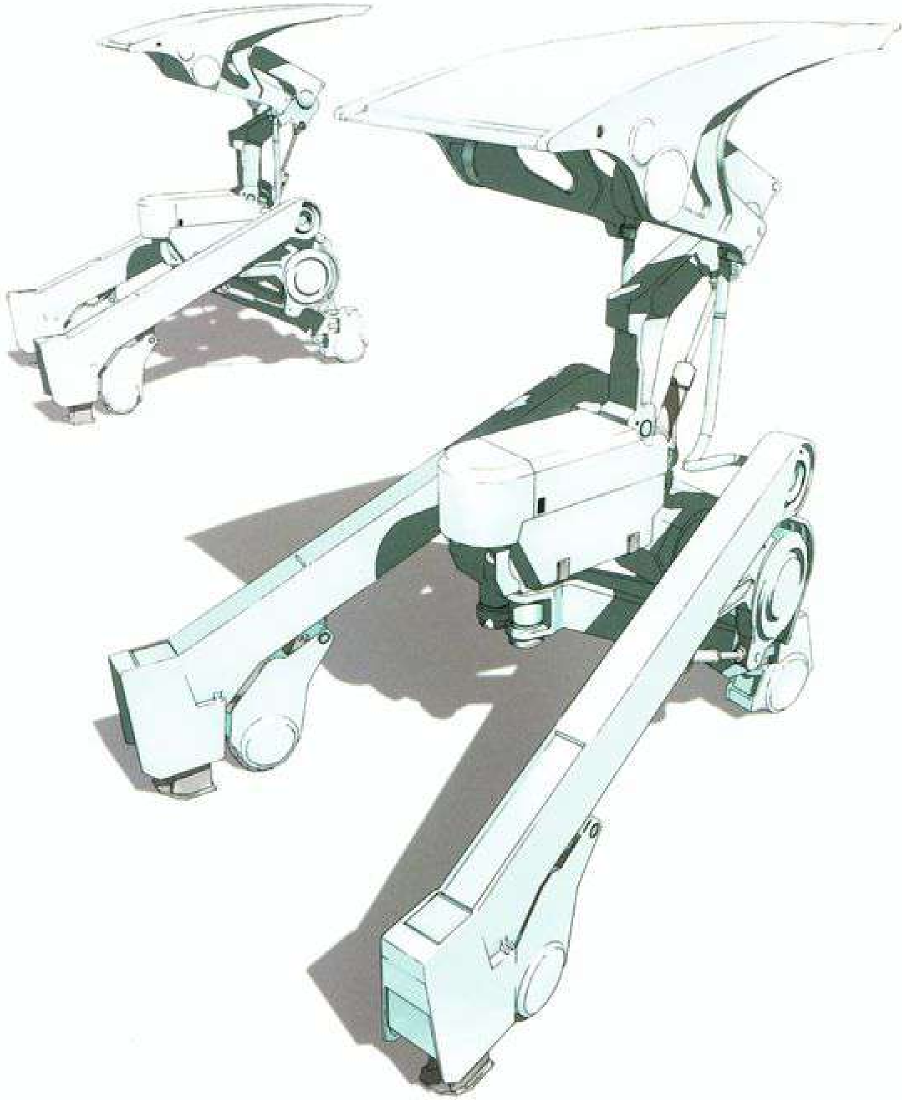


41WT Four-Link

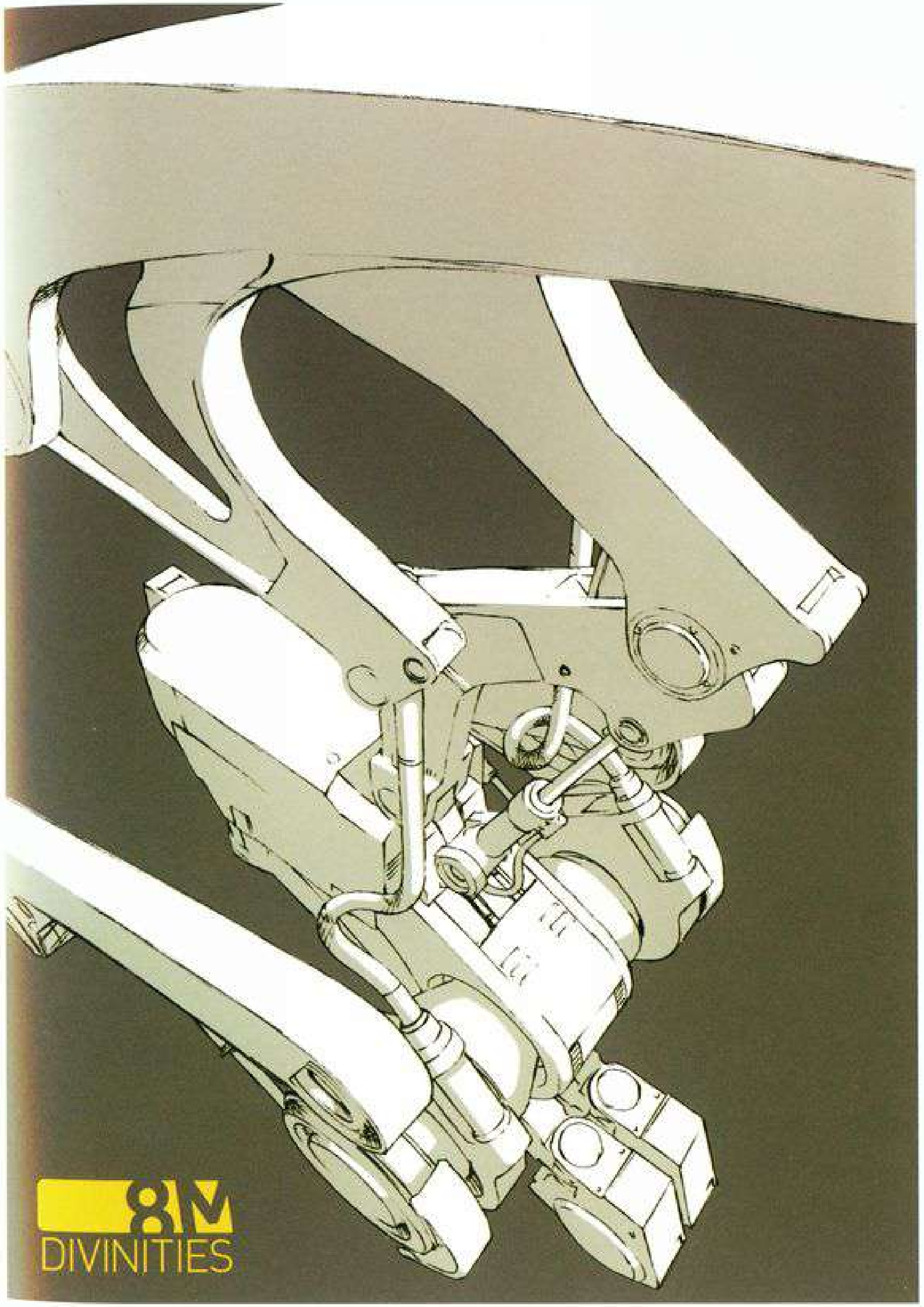
Weight:	14,900kg
Length:	700cm
Height:	690cm

川向こうの景色が変わったのはそれがやって来てから。でも、決して目障りとは思っていない。ある日、滑るように車輪で走ってきて止まった。それ以来、見ているときには大抵、動いていない。どちらが前か後ろか判らないが、みんな同じ方向を向いてただ立っている。いや、座っているのかもしれない。時々頭の角度が変わっているが、これもどう動くのかは知らない。地面を掘ったり土砂を掬うのには良さそうだが、下を向いていることはあまりない。午後の日差しに光る様子はなぜかとても心安らぐ。でも"決して側には近寄らないほうが良い"という気も、なぜかしている。

デザイン誌「DESIGN PLEX」('00年11月号)で出雲重機の特集が組まれた際にそのカバーアート用にデザインした機体。名前の「ホウリン」は大久保いわく、"厳(おごそ)かで宗教っぽい響きの音"から付けたとのこと。「翼を畳んで休んでいる翼竜」のフォルムを重機に置き換えている。頭部側面の小さな孔は、なんともいえぬ表情を感じさせる。しかし同時にこの頭部は幅をあり得ないほど大きく取り、自然物ならではのバランス、形状が崩れた部分でもある。岩盤や地面の切削、あるいは何かを掬う仕事、もしくは地下から何かを汲み上げる作業の際のポンプを動かすバランスウェイト。重機としての実際的機能や機械的効率も予感させる。 AU

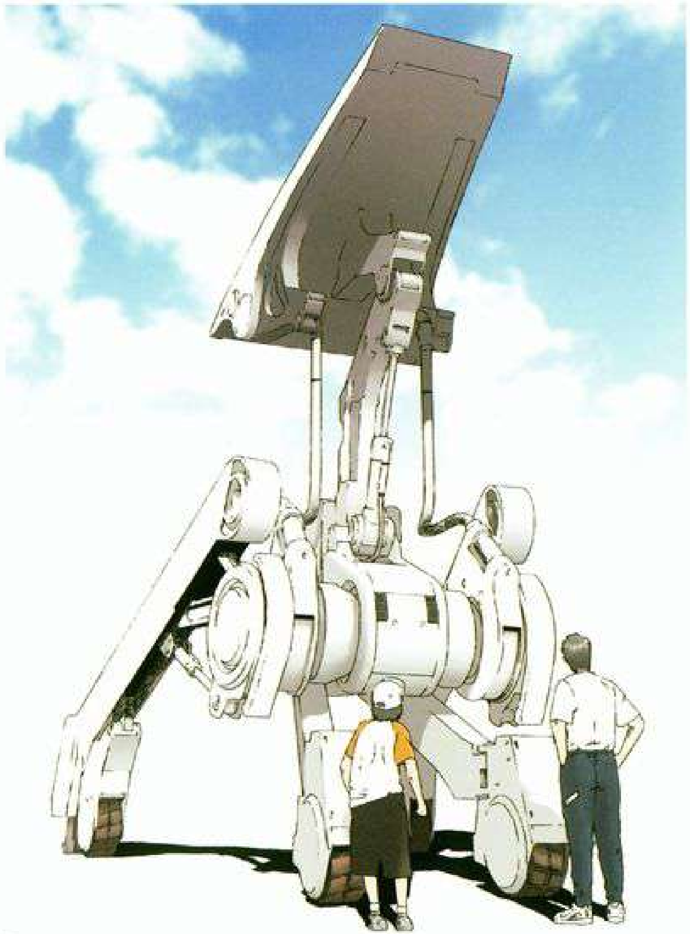






ホウリン　41WT Four-Link

仕事で巨大ロボを作る必要があって、そのときに恐竜を参考にしようと考えまして一時期図鑑に魅入っていました。遺伝子レベルで刻み込まれている彼らに対する恐怖感や畏怖の念のようなものがあるんじゃないかと思ったんです。それを応用できないかと。その時に「最新の研究成果」として、翼竜が翼を畳んで休んでいるイラストが載っていたんですね。それがなんとも美しく、また不気味でもあり、強く印象に残りました。そのシルエットを、41WT Four-Linkではフォルムのモチーフにしています。アニメやマンガ、映画に登場するものを参考にしてばかりいると、なかなか独創性を養うことができません。ですから、なるべく色々な物を実際に見たり感じたりして作品に反映させていきたいな、と思っています。



Marking Design by Seishiro RITO Fujimoto
www.beatservice.com

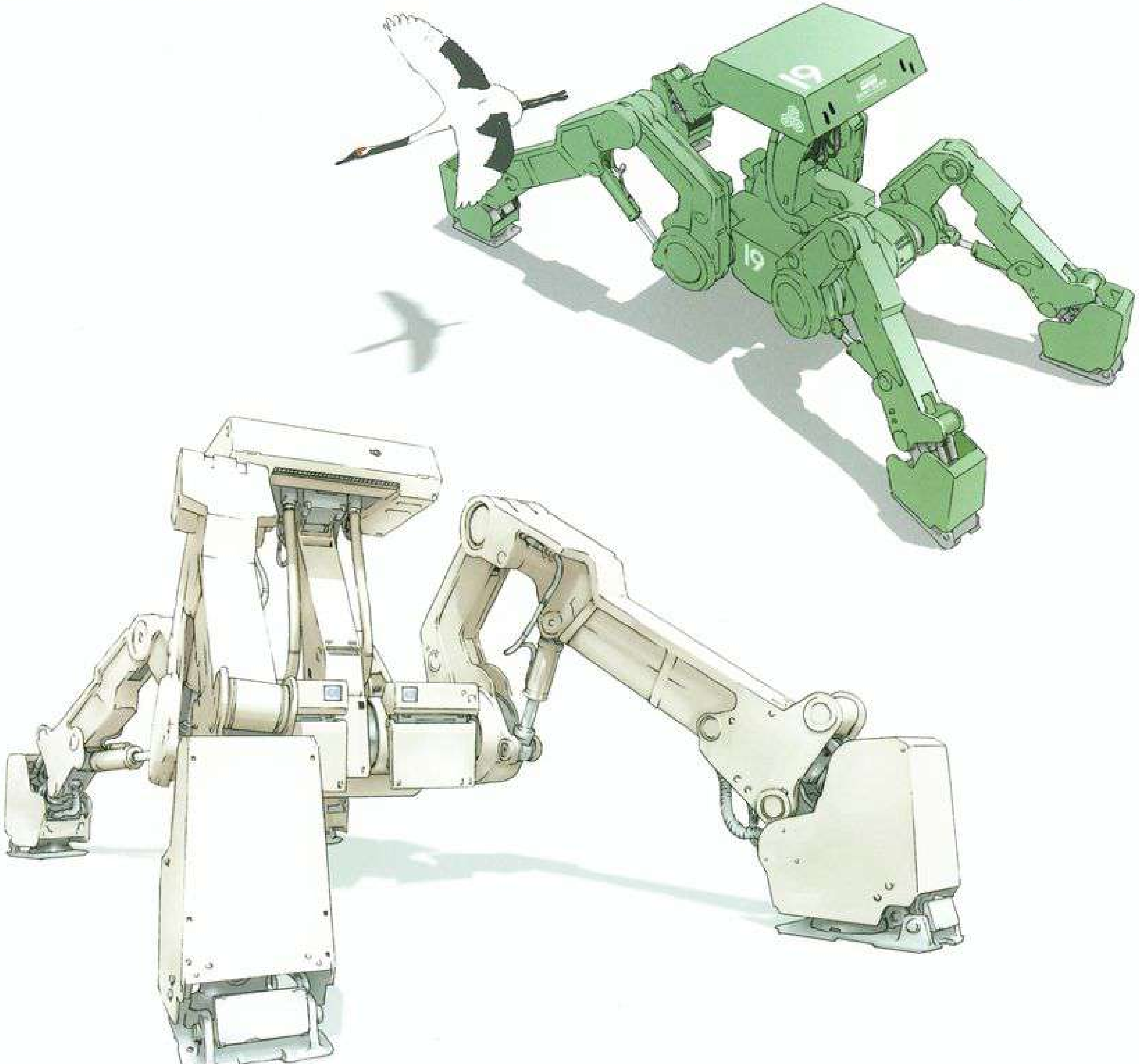


25WT Genbu

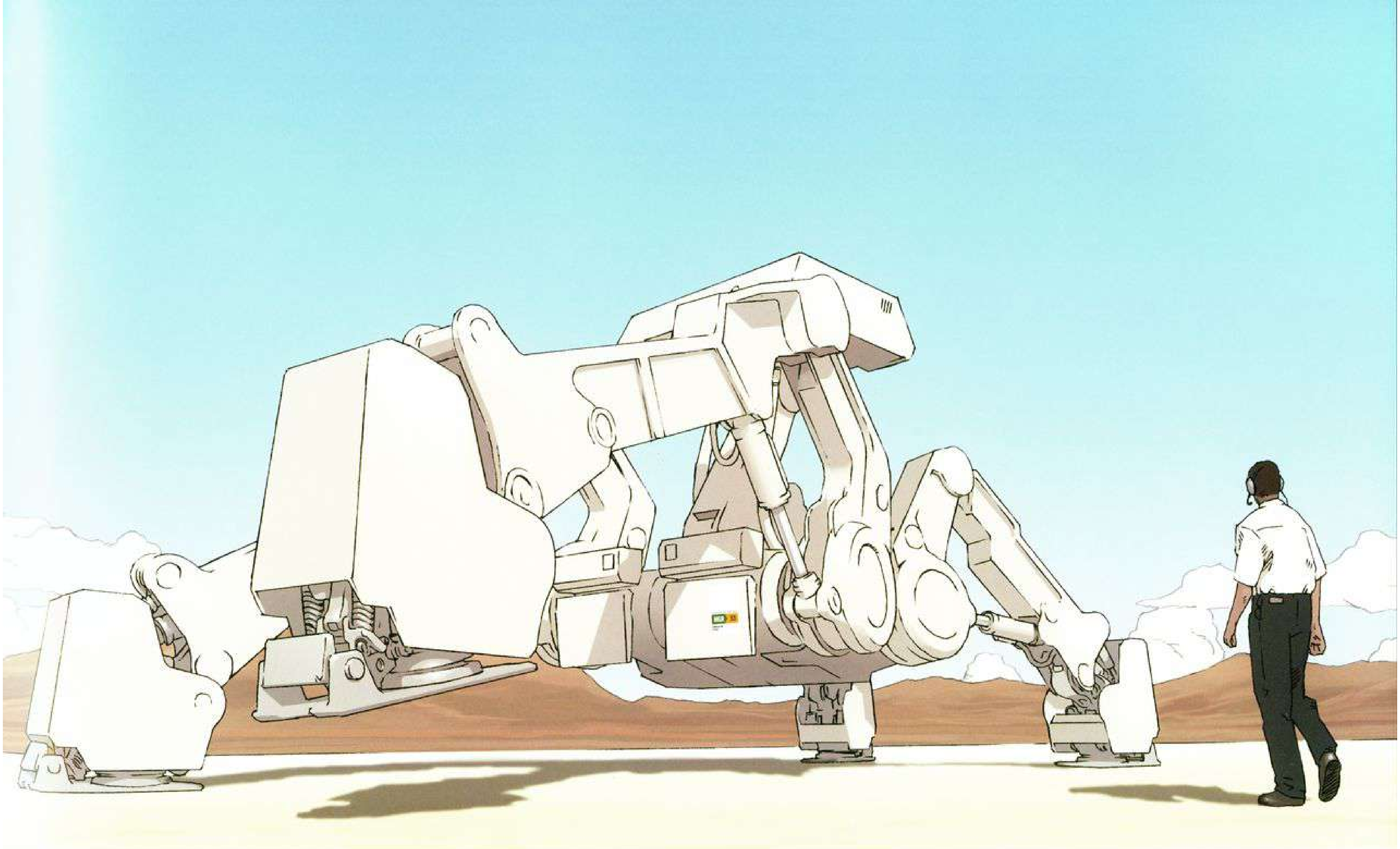
Weight:	30,000kg
Length:	1,330cm
Height:	800cm

広大な滑走路をノッシ、ノッシ、とそれは歩く。巨大な足だが持ち上がる高さはそれほどでもなく、人の腰の高さぐらい。そのぶん歩幅がとても広い。それにしても、まるで小山のような大きさ、高さ！　しかし動きはとてもゆっくりしていて、歩いているすぐ側に人が近付いても安心な印象がある。一歩、一歩、噛み締めるように慎重に歩く。無駄な音や振動は立てないようだ。"背中に最新型の美しい飛行機を乗せて歩いているのを見た"という人がいる。"いや、あれは頭で、時々斜めに傾けて空を見ている時がある"という話も聞いた。とにかく今は、ノッシ、ノッシと歩いている。平たい大きな足を、アスファルトに押し付けながら。

力強さ、優しさを表現する山型のシルエット。巨大な4脚は前後とも斜め方向に大きく突き出し、ゆっくりだが確実に歩行する機体であることを確信させる。それが証拠に、大久保は旧画稿よりも、さらに歩行を意識した脚。脚のデザインを現行型に反映させている。頭とも背中とも取れる上部の平台部分は太い首と複数の油圧シリンダーによって支えられ、相当な荷重にも耐える。3D設計によって画面のパース構成にも細心の注意が払われている点も出雲重機らしい。その手法は本機でも確実に踏襲され、巨大さとリアルさの演出に一役買っている。 AU



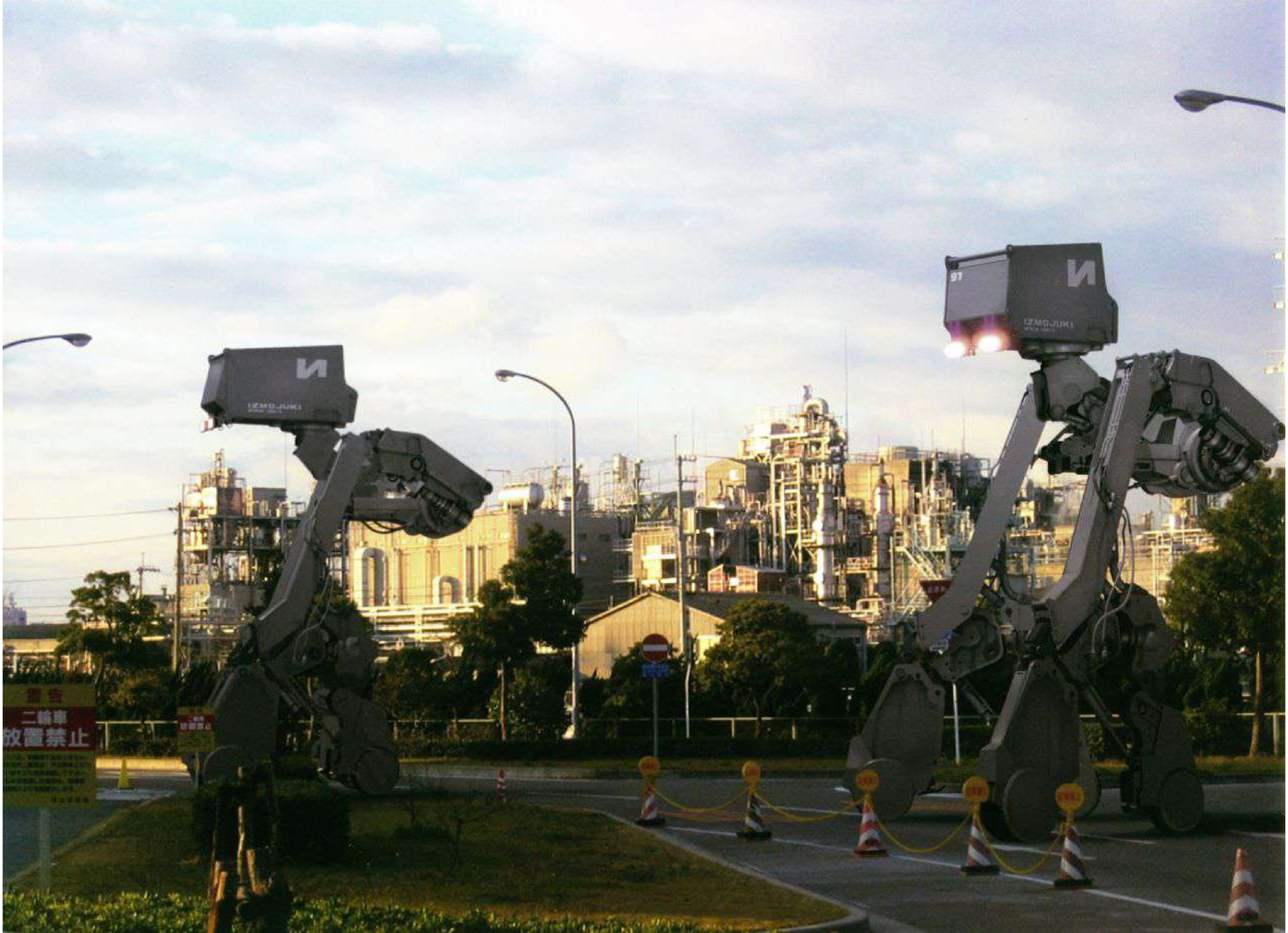




25WT **Genbu** ゲンブ

ウェアブランド時代に描き貯めたもののうちの一つでこれも初期にデザインしたものです。ナショナル・ジオグラフィック・チャンネルで陸亀の特集番組か何かを観て着想を得ました。象やサイなどの4足哺乳類と比べて、より前方に向かって斜めに付いている陸亀の脚はどこか可愛らしさも感じられます。また、三角形を描くフォルムはズッシリした印象を与え、重量感の演出になると考えました。ゲンブというネーミングは「玄武」から来ています。合成画像を作るに当って、この超大型の機体を置いても不自然にならないロケーション探しに苦労した覚えがあります。

mji



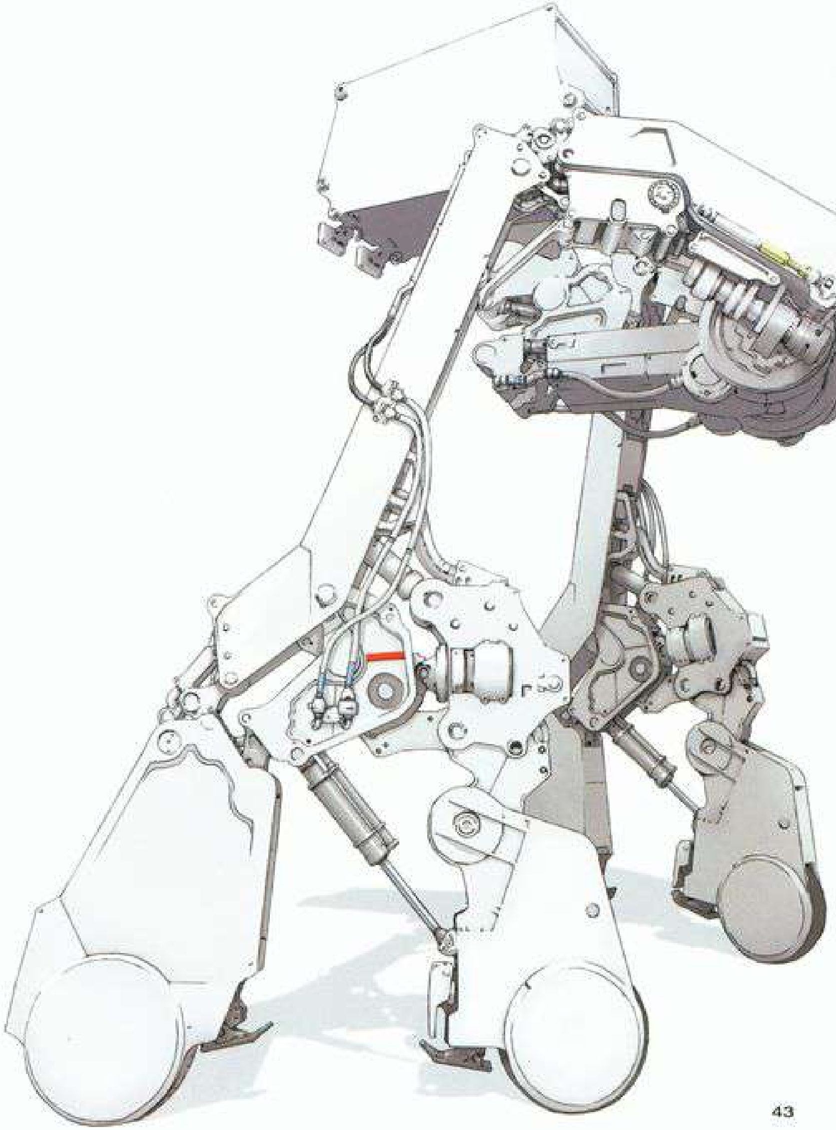
IZMOJUKI
二輪車
放置禁止
IZMOJUKI

D5WT Rou-Monn

Weight:	13,000kg
Length:	530cm
Height:	800cm

不自然に前屈みなその姿勢と、突き出された腕のような2脚。正面に立たれてちょっと睨みっぽいヘッドライトに照らされたら、きっと咎められているような気分になるだろう。腹の部分に抱え込んだ複雑な機械も気になる。何かの仕事のためにあるのだろうが、できれば自分には関係なくあって欲しい。警察が検問や違反車両の摘発に、こんな機械を導入したら嫌な感じ。逆に建物の外部仕上げや、航空機、船舶の溶接、配線などの精密な作業に当たらせたら、発注元の社長はこの重機の職人的な面影に満足するかもしれない。何にせよ、コイツを倒さずに動かせるのだから出雲重機はたいした会社だ。

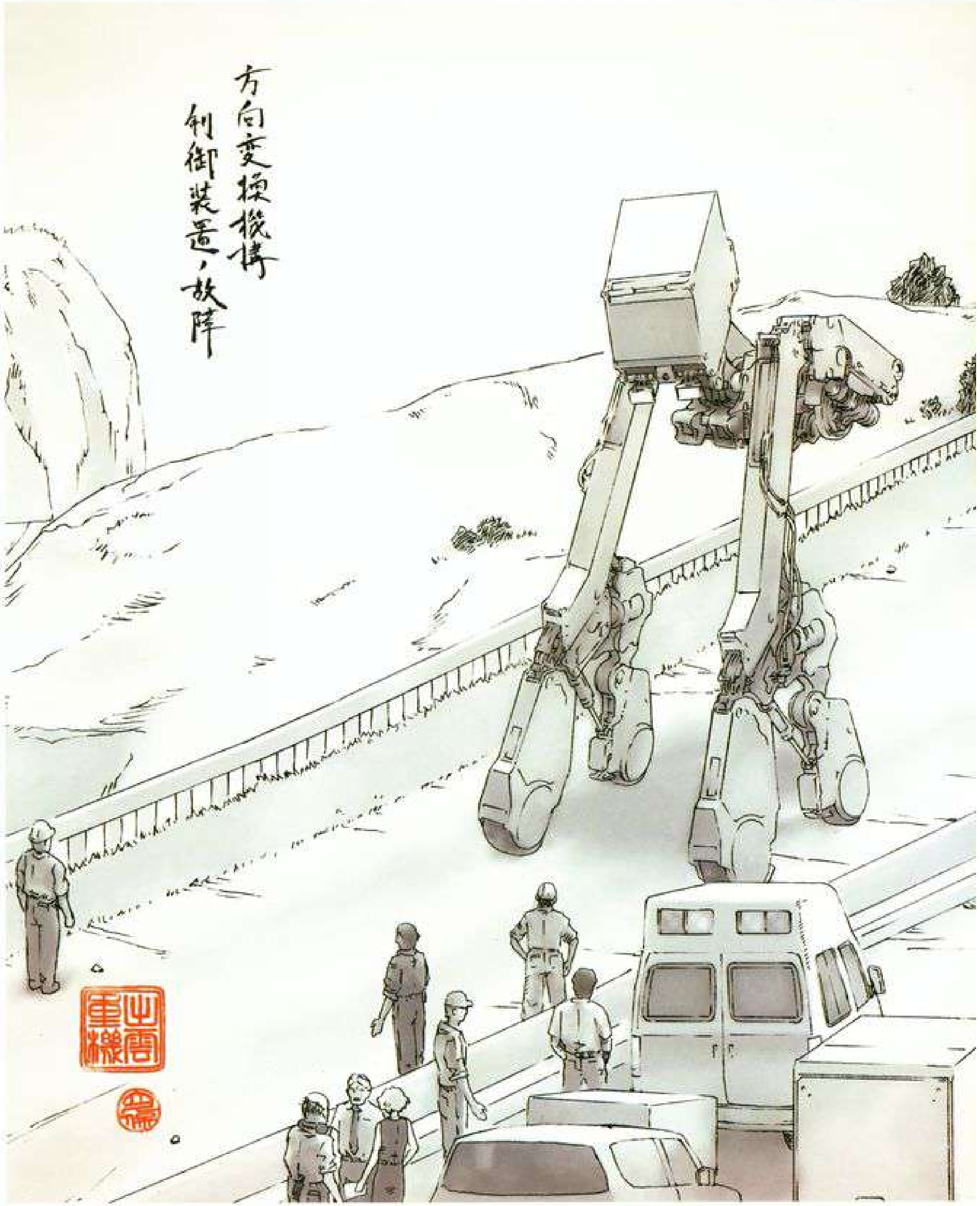
出雲重機としては初の2脚機であり、バランスが取れているのか、あるいは破綻しそうなのか、危うい魅力を放つ。特に極限的とも言えそうなほどに描き込まれた上部ユニット懸垂部と、2脚の先端が「爪先」と「かかと」の2輪に分かれる部分は圧巻。配線や油圧シリンダー、パイプ類が生々しく露出する点も異色である。なお「かかと」に関しては30WT Doton（ドトン）からのパーツ流用も見られる。 AU





D5WT Rou-**Monn** ロウモン

『STAR WARS』のAT-STや『ROBOCOP』のED-209のような非人間型2足歩行ロボットに対する私の憧れを、出雲重機の流儀で形にした、というところでしょうか。足先にヴォリュームを持たせているのは安定感と巨大感、重量感の演出のため。本体部は敢えて崩して危うく、脆い構造になっています。フォルムと同時に大地をガッと踏みしめるようなポージングが先にありきで制作し、脚部のゴチャゴチャとしたディテールは後付で快楽的に加えていきました。 umji



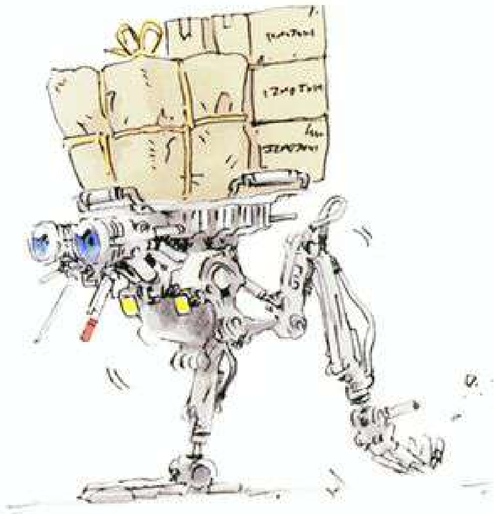

NARITA

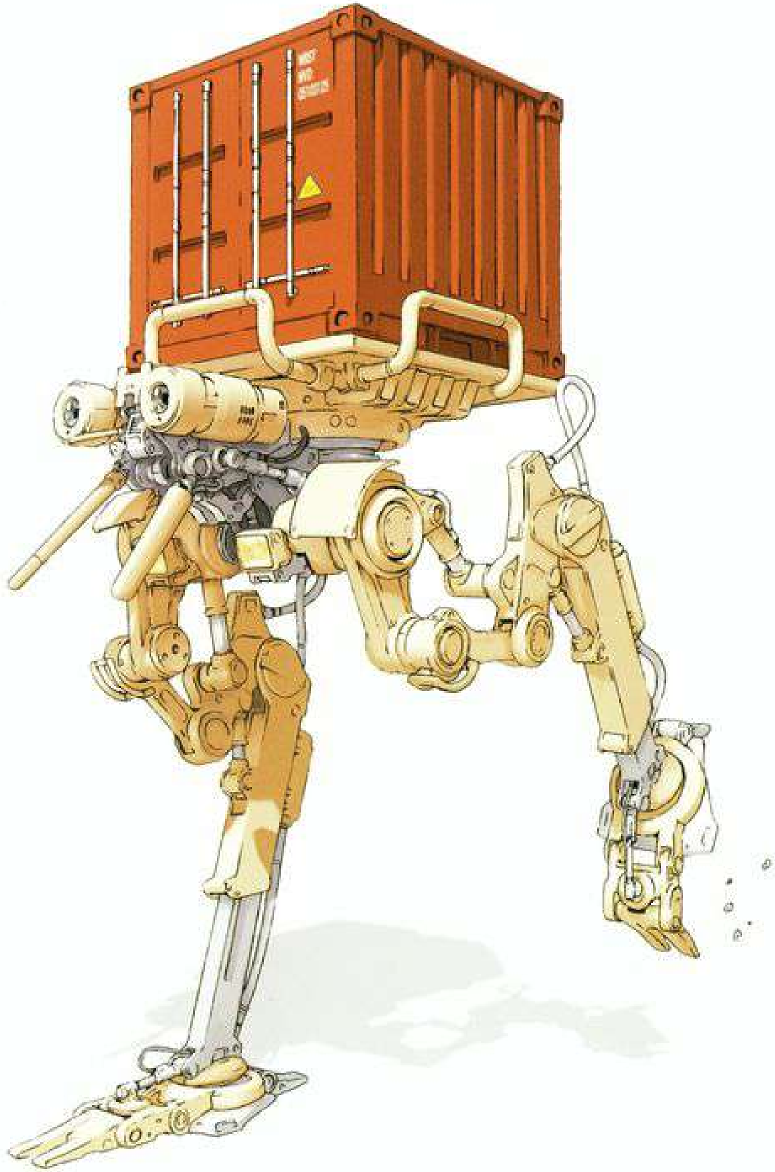
MVR5 Mover

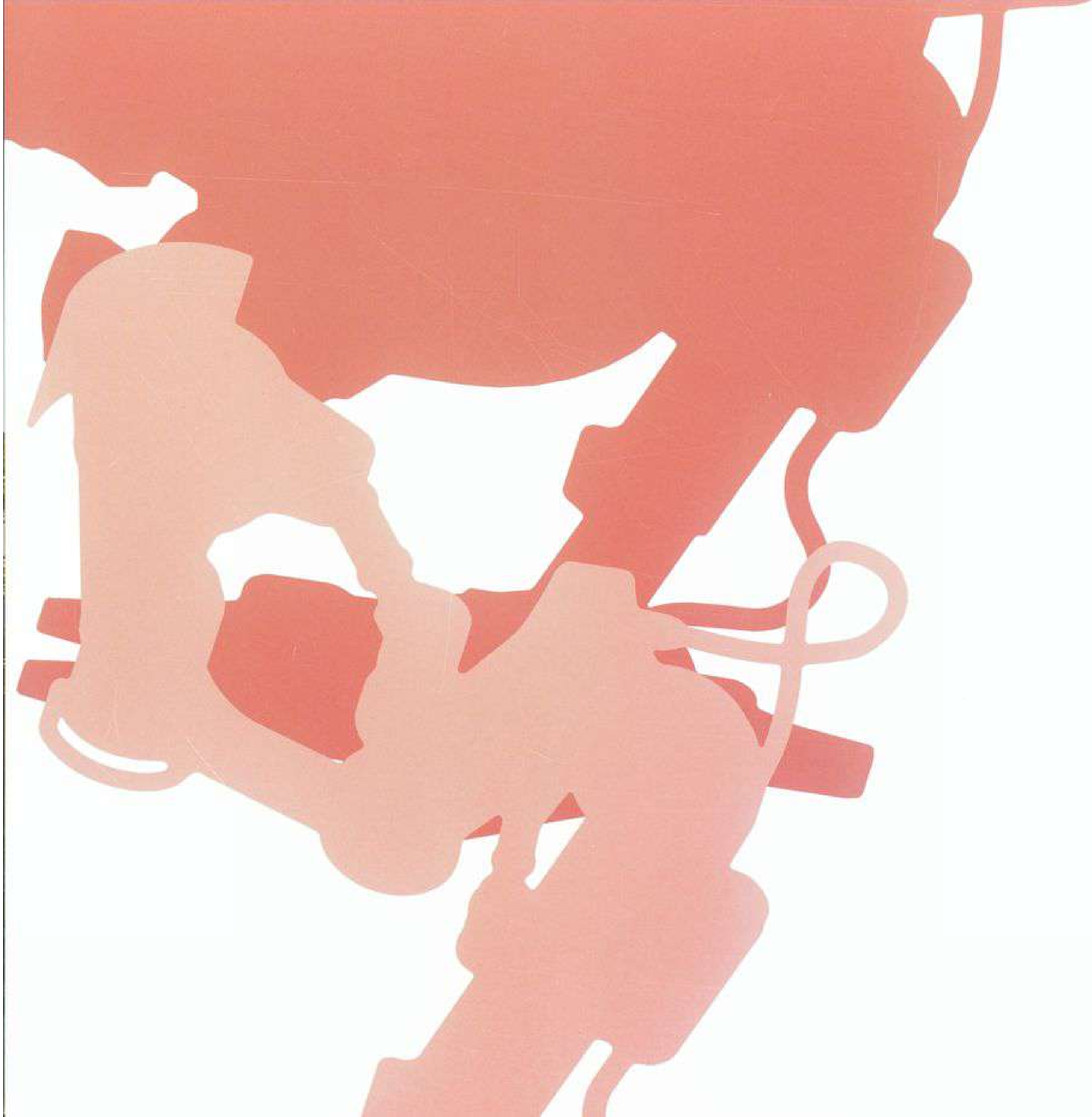
Weight:	2,900kg
Length:	340cm
Height:	470cm (excluding cart)

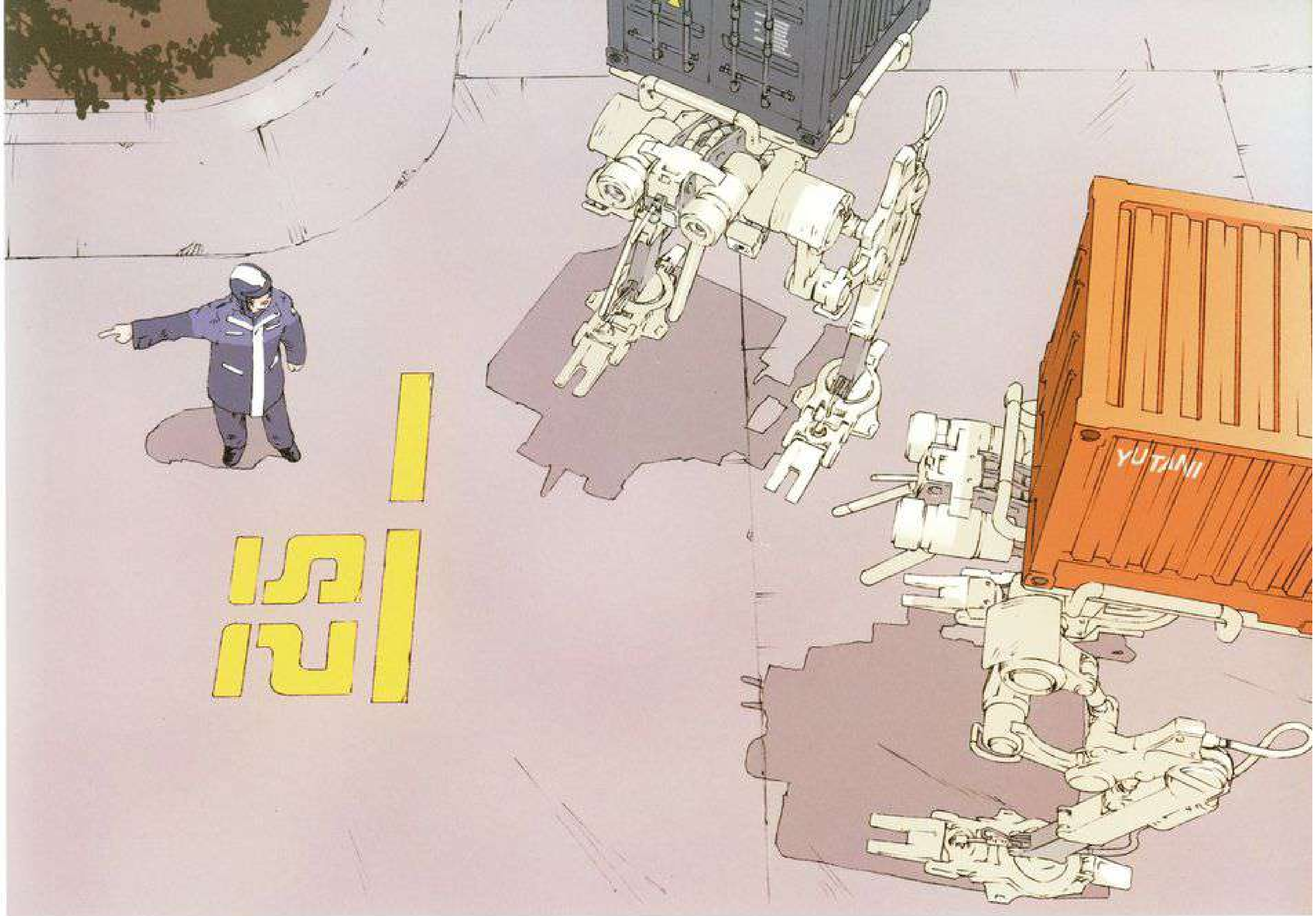
さっきからアイツ、迷ってるみたい。荷物をどこに置こうか？って。それに場所が見つかったとしても、アイツだけじゃ降ろせないだろうな。だって手が付いてないじゃないか。機械が迷うなんてことあるのかな？　大体そんな機械、どこの会社が造るの？　そういえば前に、大手の引越し業者が普通の4tトラックの代わりに何台か購入して使ってたんだよね。いやホラ、あれで作業してたら目立つじゃない。話題になれば宣伝にもなるしさ。でもやっぱり何かがいけなかったのかね？　いまはこんな寂れた倉庫街で、独りでいるよ。でも夜中じゅう、ああやって歩いているらしい。あんなでっかい目で見張られてたら、盗みに入る気もなくなるね、きっと。

出雲重機が世界に先駆けて開発した「高速2足歩行ロボット」。つま先で地面を蹴りながら走るため、ダチョウやヒクイドリの爪先形状や指の配置をトレースしている。放熱効果を高めるために外部に露出し、しかも通常より倍以上多い「1脚につき6箇所」もの多重関節の効用により、移動時の振動や上下動は完全に相殺され、荷台には一切のショックを与えないと思われる。しかし、しゃがんだ姿勢を取るにも限界がありそうなので、恐らく荷物の積み下ろしの際は専用プラットフォームが必要だろう。立体視が可能な前方に向いた1対の大型カメラとヒゲ状に突き出したセンサーが、なんともユーモラスな表情を醸し出している。 AU









MVR5 **Mover**

ムウバ

これは出雲重機のwebサイトがサーバー移転に伴ってURLを変更した際、“移転しました”のお知らせ画像として描いたラクガキが元になっています。何も考えず適当にサラッと描いたので、他と比べてやや「おちゃらけ感」があるのはその名残でしょう。当初は荷台にダンボール箱など、いわゆる引越し荷物らしいものを満載していたのですが、リアリティを出そうと思いコンテナ型の貨物に変更しました。それに伴って重機のサイズが大きくなってしまい、カメラやセンサー類が大袈裟なスケールになってしまいました。

mmji

